

ヨンチェエ・ソニョン・三浪津

—『無情』の研究(下)—

波田野 節子

【要旨】『無情』の研究(上)(中)で見てきたところによれば、ビョンヤンでヨンチェエの死に解放を感じて京城にもどり、嘲笑事件のため京城学校を飛び出した『無情』の主人公ヒョンシクの状況は、妻と五山学校を背にして東京に再留学している作者李光洙の状況に重ねて考えることができた。京城学校を出て行くヒョンシクが深刻な喪失感に陥り、これから根をはる場所を求めなくてはならなかったように、東京に来た李光洙もこれから先どのように生きるべきかを模索しており、『無情』を書くことによってそれまでの生を総括し、新しい世界観を構築しようとしたのである。そのために李光洙は、ヒョンシクの棄てた女性ヨンチェエには新たな人生をあたえ、ヒョンシクをしてそれまでの朝鮮に存在していなかった男女間の情愛「近代的恋愛」を実践させ、ソニョンとの結合がもたらした彼の身分上昇を民族への奉仕という大義名分で正当化して個人と共同体の発展を一致させようとする。本稿では李光洙のこの三つの試みをそれぞれ考察する。

一、ヨンチェエ(1)

- 1 ヨンチェエの清涼里事件
- 2 ヨンチェエの「内的自我」と「外的現象」
- 3 ヨンチェエ(≡朝鮮)の清涼里事件
- 4 ヨンチェエ(≡作者)の清涼里事件

二、ヨンチェエ(2)

- 1 二つの車中
- 2 ソウル—黄州
- 3 黄州—ソウル—三浪津
- 4 ヨンチェエの世界の崩壊

ヨンチェエ・ソニョン・三浪津(波田野)

三、ヨンチュエ(3)

- 1 ヨンチュエの救済
- 2 ヨンチュエは救われたか
- 3 『無情』と『』

六、三浪津(1)

- 3 ソニョンの変貌にあらわれた作者の意識
- 4 「近代的恋愛」の実験
- 5 李光洙の選択

- 4 『』におけるヨンチュエ

四、ソニョン(1)

- 1 見られるソニョン
- 2 ヒョンシクにとってのソニョン

七、三浪津(2)

- 1 「中華」と「大団円」
- 2 ヨンチュエの動揺
- 3 ソニョンの場合
- 4 ヒョンシクの「大変動」と秩序再編

五、ソニョン(2)

- 1 見るソニョン
- 2 ソニョンの変貌

- 1 三浪津の非現実感
- 2 舞台の装置
- 3 夢と希望の結末
- 4 李光洙と「民族」

一、ヨンチュエ(1)

1 ヨンチュエの清涼里事件

本稿(上)において筆者は、ヨンチュエが自殺を決意したのは清涼里での事件が起こる以前であったことを指摘し、すでに死の覚悟をしているヨンチュエに対してなぜ作者はこのような事件を起こさねばならなかったのかという問題提起を行って、この事件のもつ意味をヒョンシクの立場から考えてみた。それは「解放」だった。ヒョンシクに恩師の娘との結婚をせまっていた旧価値体系は、この事件によって純潔を喪失したヨンチュエから、逆にヒョンシクとの結婚

の権利を奪うことになったのであり、それこそはヨンチュエとの再会の瞬間からヒョンシクの深層に芽生えていた無意識の願望だったのである。⁽¹⁾

それではヨンチュエにとって、清涼里での純潔喪失は何を意味していただろうか。本章では、この事件のもつ意味についてヨンチュエの側から考えてみたい。

2 ヨンチュエの「内的自我」と「外的現象」

韓承玉氏は労作『李光洙研究』の中で、ヨンチュエのアイデンティティに関する興味ぶかい指摘をしている。氏はヨンチュエがヒョンシクの下宿を訪ねたときの女学生の服装に注目して、そこに良家の子女に見られたいというヨンチュエの「意志」を見出し、ヨンチュエの主観としてはそうであるつもり姿勢すなわち「内的自我」と、外からみた客観的な姿勢すなわち「外的現象」とのあいだの葛藤を引き出している。⁽²⁾

当時の妓生が私的な用事で外出するときに、ファッションとして女学生の服装をしていたという可能性は排除できないが、李光洙が登場人物、とりわけ女性の服装に気を配っていたことは、つねに行われている細かな服装描写によっても明らかである。われわれが『無情』のある場面を思い浮かべようとするとき、登場人物の服装に関する情報に何かかかっているのは、驚くほどである。第一夜に女学生の服装で登場したヨンチュエは、翌日の晩にはチマを引き裂かれた妓生のすがたでヒョンシクの前にあらわれた。翌朝ヒョンヤンに向かうときのヨンチュエはまた女学生の恰好であり、この服装がヒョンウクの注意をひいた理由のひとつであったことは、ヨンチュエにどこの学校かと訪ねたヒョンウクが、学校にいないというヨンチュエの言葉に失望していることから知ることができる。このときのヒョンウクは、日本の着物といういでたちで東京から帰省するところだった。しかし黄州でヨンチュエと過ごすうちに朝鮮の伝統文化に目覚めた彼女は、一ヶ月後に東京に向かうさいには、ヨンチュエとともに、当時の二等客車にはまれな白衣を着て汽

車に乗りこんでいる。ここには、登場人物の意識を服装に反映させようという作者の意図が感じられる。登場人物の服装と意識に相関性をもたせようとする意図が作者にあったことは明らかであろう。

女学生の服装があらわすヨンチュエの「内的自我」は良家の子女、ひいては父と古聖の教えにのっとりヒョンシクのために節を守る烈女であった。それにたいしてヨンチュエの「外的現象」は妓生である。下宿の老婆は一目でヨンチュエの正体を見抜いてヒョンシクに「髪は女学生ふうにしてたけど、どう見ても妓生のようですよ」と告げているし、ヒョンシクもまた、老婆にあたえられた先入観があったとはいえ、ヨンチュエを前にして内心、「どう見ても妓生の態度があらわれている」と考えている。「どう見ても妓生」、それが外から見たヨンチュエの姿なのだ。ましてベ学監とキム・ヒョンスにとつては単なる肉欲の対象でしかない。この広い世間でヒョンシクだけは、烈女という自分の「内的自我」を理解してくれるに違いないと信じて下宿を訪ねたヨンチュエがそこでぶつかったのは、ヒョンシクもやはり自分を「外的現象」としてしか見ないという冷徹な事実であった。

ヨンチュエがヒョンシクの下宿から逃げるようにして帰ってきたのは、身の上話をしていううちに「ふと」自分が妓生の身であることに思いをいたし、「自分が妓生だと知ったらヒョンシクはきっと自分のことを顧みないだろう」と危惧したためだった。東学の悪漢から逃げ出したところで話しを切り、老婆のむいてくれた梨を食べながら溜め息をひとつつくあいだに、ヨンチュエは「ふと」このこの危惧にとらわれたのである。身の上話はこれからヨンチュエが父のために身を売って妓生になろうとするところであり、彼女の前には、「優しいまなざしで」話しをうながすヒョンシクがいた。ついさっき、どう見てもヨンチュエは妓生だと考えたばかりのヒョンシクは、今度は突然、ヨンチュエが誰かの援助を受けてこの春女学校を卒業したに違いないと荒唐無稽にも思いこみ、早くその事実をヨンチュエの口から聞きたいと心せいでいた。

この晩、ヨンチュエを前にしたヒョンシクの心は目まぐるしく変化しているが、本稿(上)において考察したところによれば、彼の関心はつねに彼女の純潔という一点に集中しており、このような心の動きの背後には彼女との結婚の義務から解放されたいという願望が隠されていた。「どう見ても妓生」であるヨンチュエがこの春女学校を卒業しているに違いないなどという現実離れた想像や、早くそれが事実であることを確認したいという気持ちは、ヨンチュエが妓生であるという告白を期待している自分の醜さを糊塗しようとする無意識の心の動きだと考えられる。ヒョンシクのこの無意識の心の動きに、ヨンチュエもまた無意識のうちに反応する。すなわち、これから自分が妓生になりたいきさつを語ろうとしていたヨンチュエは、ここで告白の勇気を失って下宿を飛び出してしまうのである。

ヨンチュエがこのとき「ふと」自分の妓生の身分をふりかえり、告白の勇気を失ってしまったのは偶然ではない。もしヒョンシクの「優しいまなざし」の中に、たとえ自分が妓生であっても受け入れてくれる寛容を感じていたならば、ヨンチュエはそのまま身の上話を続けたことだろう。そもそも、その覚悟をもってヨンチュエはこの夜ヒョンシクの下宿を訪ねてきたのである。ところがヨンチュエは、ヒョンシクの「優しいまなざし」の奥底に自分を拒絶するものがあることを無意識に感じとってたじろいだ。そのたじろぎが「ふと」自分の身の上をふりかえらせて、自分が妓生であることを知ったらヒョンシクは自分をすてるだろうという危惧を生み、告白をあきらめさせたと考えられる。

ヒョンシクのこの拒絶はヨンチュエの烈女としての自尊心を傷つけ、彼女の「内的自我」を危機に陥れるはずであった。守節する烈女という「内的自我」は、その対象たるヒョンシクに拒絶されては存続しえないからである。しかしこの夜妓生房に帰ったヨンチュエの内部で、拒絶されたという屈辱的な思いは意識の深層に抑圧されることになった。それを打ち消すために、むしろヨンチュエの表面の意識は烈女の論理を強調し、ヒョンシクの暮らしぶりからして自分を身請する経済的な力はなさそうだから余計な心配をかけぬよう自殺しようと考えているのである。だが抑圧されたとはいえ拒絶されたという感じはぬぐえず、「ヒョンシクは私を救ってくれるようでもないし……」とか、ヒョンシクも「会ってみればただそれなりの人だ」と、ヒョンシクへの率直な失望をもらしたり、「『妓生!』」「『妓生!』」聞きたく

もない名前だ。『妓生』という言葉を使っただけでも歯ぎしりするようだ⁽¹⁰⁾と、拒絶された原因である妓生の身の上を呪ったりしたあげく、最後には「死ぬしかないわ⁽¹¹⁾」とあきらめる。現実のヒョンシクが、夢に描いていたヒョンシクとは違って自分の「内的自我」を理解してくれず、自分を受け入れてくれそうにないことで、ヨンチュエの「内的自我」は無意識のうちに崩壊の危機に瀕しているのである。それを守るためにヨンチュエは烈女としての死を夢想したが、自殺の本来の理由はヒョンシクに拒絶されたことにある。翌日ヨンチュエは旅費の工面のために知人をまわり、うまくいかぬまま夜をむかえる。そして、その晩清涼里で事件に遭い、それを遺書の中で自殺の直接原因におきかえて、烈女としての面目を守ったのである。

ところで、もし清涼里の事件が起きなかったら、たとえばヨンチュエに旅費の工面がつき、清涼里の事件にあわずに純潔のまま大同江にむかっていたら、どうなっていたであろうか。おそらく車中でのヒョンウクとの出会いは、違ったものになっていたことであろう。ヒョンシクによけない心配をかけないために死ぬのだという大義名分と、父と古聖の教えを守り通したという矜持をもつヨンチュエは、そもそもヒョンウクに自殺のために汽車に乗ったことを打ち明けなかったにちがいない。この矜持が打ち破られるためには、ヨンチュエが自分に対して抱きつづけてきた守節する烈女というイメージつまり「内的自我」が壊れることが必要だった。作者は清涼里の事件を、ヨンチュエの表層の意識における「内的自我」の破壊装置として設定したのである。

この事件はもうひとつ、ヨンチュエに外的な死をせまる装置としても機能している。ヒョンシクへの告白をあきらめて掃蕩したヨンチュエは、拒絶されたという思いを意識の明るみに出さぬまま烈女としての死を考えたが、死を夢想することとそれを実行することのあいだには、大きな溝がある。この事件がおきなかったら、あるいはヨンチュエはそれまでと同様ヒョンシクのために節を守りつつ、ヒョンシクに迷惑をかけぬようひっそりと彼女の「内的自我」をたもって、ソウルの片隅で生きていったかもしれない。ところが清涼里でベ学監らはヨンチュエを「外的現象」たる妓生と

して徹底的に客体化し、ヨンチュエは烈女ではなくただの妓生に転落した。いまやヨンチュエには、打ち砕かれた「内的自我」に殉ずるか、外的なすがたに順応して妓生として生き続けるかのどちらか一つを選ぶしか道はなくなった。ヨンチュエは前者を選んで、ピョンヤンに向かうことになる。

3 ヨンチュエ(朝鮮)の清涼里事件

ヨンチュエは作者の祖国朝鮮を象徴する存在だと考えられる。ケ・ウォルヒャンというヨンチュエの妓生名からして、壬辰乱のさい身をしていして金應瑞の敵将殺害に協力し、晋州の論介とならび称された伝説的な平壤妓生桂月香⁽¹²⁾と同名であるし、ウォルヒャンが姉のように慕い、理想の妓生とあおいだウォルフアがみずからをたとえた名妓松伊は古小説『秋風感別曲』の主人公彩鳳⁽¹³⁾の妓生名でもあり、韓承玉氏は英彩⁽¹⁴⁾の名はこの古小説の主人公に由来すると主張している。

しかしながら作者はヨンチュエを理想化しようとはせず、あくまでも客観的に描いている。ヨンチュエが妓生に転落したのは、幼さゆえの無知とはいえ女衞の甘言にのったヨンチュエ自身の選択であり、その原因はヨンチュエが父を救う烈女という美名に騙され、虚栄の罠にはまったせいであった。妓生になったヨンチュエの守節の一途さを称える一方で作者は、ヨンチュエの守節の根拠である彼女の世界観の弊害も書きもらしてはいない。ヨンチュエは幼い時代に知った人々は善人、不幸な時代に知った人々は悪人と、人間を善悪に区分し、自分とヒョンシクは運命のいたずらで悪の世界に迷いこんだ善の世界の住人であり、いつかこの悪夢は終わって物語はハッピーエンドをむかえると夢見ている。ヨンチュエの世界は凍りついたように美しいが、固定したまま変化と発展のない世界でもある。ヨンチュエは「繭にとじこもった蚕⁽¹⁵⁾」のように、この幼いころの世界観にとじこもって現実を回避しているのである。

ヨンチュエの貞操喪失が朝鮮の国権喪失という現実を象徴しているという指摘には妥当性があるが、ヨンチュエがこの

ように客観的に描かれていることを考えると、作者がこの象徴によって意図したのは民族の悲しみと怒りの表出だけにとどまらないように思われる。現実には妓生であるヨンチュエが守節する烈女という主観的自我に固執しているのと同じように、すでに植民地に転落している朝鮮が旧価値体系の小中華であることに固執して劣敗者としての自分の客観的すがたを受け入れようとしていないと考えた作者が、ヨンチュエの貞操喪失というショック療法をもって、旧来の内的自我にとじこもらず外からみた自己の現実のすがたを直視するよう、自民族に要請しているように思われるのだ。力の論理が支配する帝国主義の世界で植民地という劣敗状態におちいった民族の再生は、自己の弱さを直視し、それを克服することからしか始まらない。弱者であるヨンチュエは世間の無情にいたぶられ、ヒョンシクの無情につきはなされ、内的に殺されたい外的に死をえらぶ。ヨンチュエを苦しめる世間の無情と、ヨンチュエを救おうとしないヒョンシクの無情は、祖国を植民地化する日本の無情とそれを傍観する世界の無情に通じている。世間の無情に翻弄されて死をえらぶヨンチュエに感情移入した読者が、主観的自我の崩壊を契機としてよみがえってくるヨンチュエとともに無意識に再生の道にふみだすことを、作者は期待したのではないだろうか。李光洙にとってそれは、他者の無情を現実としてみずえたいうえで自己の弱さを受け入れることから始まる弱さの克服であり、力の論理への参加、すなわち自強運動だったはずだ。

4 ヨンチュエ(II作者)の清涼里事件

それにしてもヨンチュエの不幸の極限化には、こうした意図をこえて作者自身の内的な要請を感じさせるものがある。父は民族のために尽くしたあげく投獄され、一家は離散し、親戚に身をよせたものの冷遇され、飛び出してついには妓生に転落するヨンチュエ。父を救おうと身を売ったのに金は持ち逃げされ、父と兄はこの行為を誉めるところか恥じて自害する。つぎつぎと襲いかかる不幸にヨンチュエは翻弄されるがままである。こんな不幸もヒョンシクとの再会に

よって終わりを告げるかにみえたが、ヒョンシクは無情にも彼女を受け入れそうにない。それを察したヨンチュエが死を決意するだけでも十分すぎるほど不幸なのに、そのヨンチュエから最後の抛り所であった純潔まで取りあげたうえ、その現場をヒョンシクに見せるという展開は、ほとんどサディスティックですらある。ここにはストーリー展開の必要のほかに、作者個人の内的な動機が感じられる。

『多難半生』²⁾ 途程』で李光洙は、『無情』の前半部のヨンチュエの幼年時代は自分の幼い時代の懐かしくもつらい思い出であり、そのころの忘れられない記憶を描きたい衝動が自分が筆をとった動機であると述懐している。⁽¹⁷⁾ 李光洙の孤児経験が極度につらいものであったことは、ヨンチュエの回想を通して、また作者の他の作品からもうかがうことができる。それに続く日本留学時代も決して明るいものではなかったことは、そのころ書かれた処女作『愛か』から伝わってくる深い孤独感によって推測される。『愛か』が典型的であるが、李光洙は現実のつらさを何とかのりきろうとする衝動を創作動機としていたように思われる。実際に自殺をしなくてはならぬほど追いつめられた心情を、小説の主人公を自殺させることで克服して生きのびようとしたのである。『無情』と同時期に執筆された『彷徨』や『尹光浩』にも、『愛か』と変わらぬ危機的なまでの孤独感があらわれており、李光洙には自分を救済するためにこれらの作品を書くことが必要であったことを感じさせる。李光洙は、自分の分身であるヨンチュエに極限の不幸を体験させることによって、ともすれば生きる意欲すら奪ってしまいそうな孤独感をなんとか克服しようとしていたのである。そして、作者のこうした内的動機がもつ切実さによってこそ、ヨンチュエの不幸は読者の胸に深い情感の波をおこすことができたと思われるのだ。

一、註

(1) 波田野『「無情」の研究(上)』(一九九三『朝鮮学報』第百四十八輯)参照

ヨンチュエ・ソニョン・三浪津(波田野)

(2) 韓承玉「李光洙研究」(鮮一文化社一九八四)六三頁、六五頁

(3) 四節 全集1 二〇頁

머리는 여학생 모양으로 하였으나 아무리 보아도 기생 같 습니다.

(4) 八節 全集1 二六頁

아무리 보아도 기생의 태도가 나타난다.

(5) 三五節 全集1 六八頁

영재가 형식을 대하여 자기의 신세를 말하다가 문득 생각 한즉 자기는 기생의 몸이라 형식이 아직 혼인 아니하였다는 말을 들으니 잠깐 기뻐하였으나, 자기가 기생인 줄은 알면 형식은 반드시 자기를 몰아보지 아니하리라 하였다.

(6) 一五節 全集1 三七頁

다정한 눈으로

(7) 前掲『無情』の研究(上) 四九~五一頁

(8) 三五節 全集1 六九頁

정작 만나고 보니 이 형식은 나를 전혀 볼 것 같지도 아니 하고...

(9) 同上 全集1 七〇頁

그러나 만나고 본즉 그저 그러한 사람이로구나,

(10) 同上 全集1 六九頁

「기생!」「기생!」, 듣기 싫은 이름이다. 「기생」이라는 말만 하더라도 차가 멀리는 것 같았다.

(11) 同上 全集1 七〇頁

축는 수 밖의 없다.

(12) 語文叢書〇一〇「壬辰錄」 五四頁

(13) 韓承玉「李光洙研究」第2章 系辭攷 一六五~一八九頁

(14) 三〇節 全集1 六〇~六一頁

(15) 九四節 全集1 一六一~一六二頁

누에가 고치를 짓고 그 속에 들어 있던 모양으로,

(16) 金允植氏は「李光洙와 그의 시대」の中で「無情」の第四の構造層を「恨」であるとして、ヨンチュエを「解められた本来的価値の世界」を代表する人物としている。(五五八頁) また韓承玉氏は前掲書で次のように述べている。「ヨンチュエ가 兩班의 家門から 他人의 玩弄物である 妓生に 転落する 点、その せよ ヨンチュエ自身は 外的な 現象(植民地)を 否定し、内的な 自我(祖国・主体性)을 固守しようとした 点、しかし 内には 内的な 自我までも 破壊される という 点(眞操의 毀損)、それは 死に まで いたる 点、結局は 生の 維持・發展 という 観点から 再生させる という 点(李光洙의 民族에 對する 見解、信念을 代弁している と思われ)、また ヨンチュエ를 留學의 途につかせて 後日을 期せしめる 点などは、すべて 當時의 わが 祖国의 現実と一致させる ことができる 点である。」(六七~六八頁 原文朝鮮語)

(17) 「多難한 半生의 途程」(一九三六) 全集8 四五二頁

二、ヨンチュエ(2)

1 二つの車中

本稿(上)で筆者は『無情』において汽車がもっているベルクソンの意味を指摘し、非日常空間ピョンヤンでピョシンの「本来の自我」が噴出する過程を考察した。作者が汽車に付与していた特別な意味は、ヨンチュエとピョシンの出会いが走りつづける車中であつたことに、より端的にあらわれている。ヨンチュエがピョシンの説得を容易にうけ入れた背景には、清凉里事件によって「内的自我」を破壊されたことのほかに、ソウルやピョンヤンという空間の束縛から離れて動きを継続しつづける汽車の中という場面設定が大きな意味をもっていたと思われるからだ。本章では、ヨンチュエがピョンヤンに向かう車中でピョシクと出会って自殺の決意を翻す場面と、彼女が釜山行き列車の中でピョシンの婚約を知って動揺する場面を詳察したい。

2 ソウル・黄州

南大門駅を出発してソウルから離れるにつれ、ヨンチュエの意識はソウルという空間の束縛から解放されてゆき、うつり変わる窓外の風景を見ながらヨンチュエはまるで夢をみているように、「見えないものを見ようとも、見えるものを見まいともせず、目に入ってくる通りに見、耳に入ってくる通りに聞」く状態に入ってゆく。「内的自我」を喪失し、「外的現象」を拒否して死を決意していたヨンチュエはこのとき、女学生の服装をした妓生でもなければ烈女でもない、ひとりの若い女性であった。どこにも属さないこの空間において、彼女は「普通の人間」というアイデンティティを獲得する。そうしてあらわれたヨンチュエの「本来の自我」、それは生きつづけることに本能的に執着する人

間のすがただった。

石炭の粉が目に入った痛みによる涙は、自分が死のうとしていることへの恐れと悲しみを誘発し、ヨンチュエは「目に石炭の粉が入ったことも忘れて」⁽⁴⁾ひたすら泣いた。石炭の粉をとってくれたピョンウクにサンドウィッチをふるまわれたあと、ふたたび泣き出したヨンチュエはピョンウクに向かって、「お姉さま、ありがとうございます。私は死にゆく身なんです。ああ、ありがとうございます。」⁽⁵⁾と打ち明ける。ヨンチュエの生きつづきたい気持ちは、この告白にすでにあらわれている。ピョンウクがこのような言葉を聞いて放っておくような人間でないことは、それまでの親切で頼もしい態度から明白だからだ。ヨンチュエに対するピョンウクの説得は、啓蒙家としての李光洙の面目躍如たる場面だが、告白という行為自体がヨンチュエの生を望む気持ちから出ている以上、ピョンウクの説得の成功は初めから決まっていたといえる。

ピョンウクの説得は、ピョンシクにたいするヨンチュエの気持ち「愛」ではなく、父親の言葉を拡大解釈した儒教的義務感であるということ的前提としている。ピョンウクは鋭い分析によって、ヨンチュエが想いつづけていたピョンシクと現実のピョンシクとは別のものであることを指摘し、二日前に現実のピョンシクにたいして失望感をいだいたばかりのヨンチュエはその指摘に納得するところがあつた。⁽⁶⁾

ピョンシクへの思慕の正体がたんなる儒教的義務感であるなら、その儒教自体を否定すれば、守節の義理を果たせなかったことを理由とする自殺は無意味となる。ヨンチュエとの結婚の義理から逃れたいと願ったピョンシクが、義理の根源である儒教を正面から否定しえぬため、無意識のうちにヨンチュエの純潔喪失と死をのぞむという陰鬱な方向へ向かったのは対照的に、ピョンウクは一刀両断に儒教を切り捨て、返す刀でピョンシクに対するヨンチュエの情も明快に否定してしまった。⁽⁷⁾生への執着をとりもどしていたヨンチュエは、ピョンウクのこの説得を受け入れて再生を決意する。

しかしながら、前章で見たように、もともとヨンチュエが死を思いたつたのは、ピョンシクに自分を受け入れる意志のないことを無意識に感知して絶望したためであり、清涼里の事件はその死に口実をあたえて実行をうながしたにすぎなかった。ヨンチュエがピョンシクを求める気持ちはピョンウクのいう「愛」でないかもしれないが、七、八年間それを心の支えにして生きてきた彼女にとっては、すでに自分の一部になってしまった感情である。それゆえピョンウクの雄弁は、節を守れなかったための自殺は簡単に否定することができても、心に解決をあたえることはできないだろう。「すぎたことは全部忘れて、新しくすべてを始めるのよ」というピョンウクの言葉にしたがい、ヨンチュエは黄州で下車することになった。しかし、人間の意識が記憶そのものである以上、「全部を忘れ」⁽⁸⁾ることはありえない。⁽⁹⁾一ヶ月後にピョンシクと再会したヨンチュエが心に大きな動揺をきたすのは、ピョンシクへの情がすでに自分の一部となって「胸の奥深く」⁽¹⁰⁾残存しているためである。

3 黄州—ソウル—三浪津

黄州でピョンウクとともに一ヶ月過ごすうちに、ヨンチュエの感性は、「あたかも生まれてからずっと暗くてせまい穴蔵で暮らしていたのが、はじめて太陽の光りがあり、風が吹き、花が咲き、鳥の鳴く世界に出てきたよう」⁽¹¹⁾に開花してゆく。ヨンチュエの自我が目覚めてゆく過程は、ピョンシクのそれと相似しており、ピョンシクとヨンチュエともに作者自身の投影であることを傍証している。「ヨンチュエはコムンゴをつまびき、ヴァイオリンを弾く。だがその音がすべて新しい色合いを帯びている」⁽¹²⁾という部分は、ピョンシクがイエスの画像をみたあとで情を解放させたときの感覚を想起させるし、ヨンチュエが「人生には自由で楽しくて広い世界があることに気づ」いて「自由な人間となり、若い人間となり、若くてきれいな女性になった」という部分には、ソニョンやスニなどの若い女性の美しさをありのまま受け入れたピョンシクが、「人生は楽しもうと思えば楽しめるものだ」⁽¹⁴⁾という感慨をもったことが思いあわせられ

このようにしてジョンウクは、ヨンチュエの悲しみと憤りに社会改革という方向性をあたえて、そのエネルギーを転換させようと試みる。出会いの場面にひきつづき、ジョンウクの説得は作者の読者にたいする啓蒙の意図が露骨に出ている部分であるが、それにたいするヨンチュエの対応はあくまでも「普通の人間」らしい。自分のことをこんなに心配してくれるジョンウクにこれ以上強情をはるのは申しわけないような気がして、ヨンチュエはとけぬ悲しみをおさえながら、苺を食べはじめたのだ。

車窓には雨粒がしだいに激しく流れ、ゆれる電灯の周囲にはカゲロウがむらがっている。その下で白いチマチョゴリを着たヨンチュエが苺で唇を真っ赤に濡らしている様子は、彼女のとけぬ「恨」を形象化して、ジョンシクに鳥肌をたたせる(口から赤い血を吐く白衣の女というイメージを、作者は、第一夜のジョンシクの覚醒夢から一貫してヨンチュエにまつわりつかせている)。作者も書いてるように、長年の悲しみが凝り固まったヨンチュエの心は、このような言葉で解決がつかはすがないのである。⁽²⁰⁾

4 ヨンチュエの世界の崩壊

ヨンチュエの悲しみは、自分の今までの人生が何のためだったのかという虚脱感からきている。七、八年ものあいだ必死に守ってきた貞操は、もちろん、それを捧げるジョンシクのためであったが、生死もわからず、生きていてもすでに結婚しているかもしれない男のための守節は、それ自体が目的と化していた。それは幼い頃うけた父の教えを守るためであると同時に、それに付随する自分の幼年時代の美しく凍りついた世界を守るためであった。清涼里の事件でこの世界は毀損されたが、それはあくまでもベ学監とキム・ヒョンスという外部からの強制によるものであり、内部から崩壊したわけではなかった。一ヶ月前、ヨンチュエの自殺を断念させるために、ジョンウクはヨンチュエのこの世界が儒教のまやかしと束縛によるものだ⁽²¹⁾と明快な理論で説得し、ヨンチュエも一度は納得した。だが、儒教はただ外か

らの束縛ではなかった。それは、儒者であるやさしい父、あたたかな家庭、懐かしい幼い日々の思い出と深いところで溶けあってヨンチュエの内部にしっかりと根を下ろし、その後の人生が不幸であればあるだけ、心の支えとしての機能を果たして、ついには生存理由にまで昇華されていたのである。論理の次元ではなく感情の次元で、ヨンチュエは儒教と結びついた自分自身の過去に囚われていたのだ。その世界と現在の自分をつないでくれるのがジョンシクであった。ヨンチュエが、ジョンシクの拒絶を無意識の領域におしとどめているのは、それを意識化させればこの世界が内部から崩壊するからである。

「今お会いしたら…」と、再度ジョンシクの愛を求めようとしたヨンチュエの心の奥には、現在のジョンシクは自分の残した遺書によって、自分の守節の事実を知っているという安心感と、あのような事件のあとに烈女としてとるべき行為をとったことへの自負があったと思われる。自分の「内的自我」は、いまやジョンシクの知るところになっている、本当の姿を知りさえすればジョンシクは当然自分を受け入れてくれるだろうと、ヨンチュエは期待したはずだ。ところが、そのジョンシクは自分の自殺に対して一年の喪にさえ服してくれずに、さっさとソニョンと婚約して米國に向かうところであった。自分の行為がジョンシクに完全に無視されたという事実の前で、あの夜すでにジョンシクから受けていた拒絶感⁽²²⁾は、表面化されざるをえなかった。ジョンシクは自分と同じ世界の住人ではなかったし、ヨンチュエの「内的自我」如何にかかわらず、ジョンシクにはヨンチュエを受け入れる意志がなかったのである。「ジョンシクは自分を塵芥くらいにしか見なしていない」ことを実感したヨンチュエに、「今まで全力をつくしてきたことが何の意味もないように思われ、失望と悲しみが一度にほとぼしり出⁽²³⁾た。ヨンチュエのこれまでの世界は、今ようやく内部の深いところから崩れはじめたのだ。

二、註

(1) 波田野『無情』の研究(上)「八二頁

ヨンチュエ・ソニョン・三浪津(波田野)

(2) 八六節 全集1 一四九〜五〇頁

그대서 영재는 꿈꾸는 사람 모양으로 안 보이는 것을 보러

고도, 보이는 것들만 보려고도 아니하고 눈에 들어오는 대로 보고 귀에 들어오는 대로 들었다.

- (3) 波田野『無情』の研究(中)「1. 註」(3) 参照
- (4) 八七節 全集1 一五〇頁

영제는 눈에서 단 가루 떨어진 것도 잊어버리고 혼자 슬피 서 있었다.

- (5) 八八節 全集1 一五三頁
- 『형님 감사합니다. 저는 죽으려 가는 몸이야요. 아아 감사합니다.』

- (6) 八九節 全集1 一五三頁
- なるほど, いままでヒョンシクを愛したことはなく, ただ幻として自分の気に入る人間を作ってその人にヒョンシクと名前をつけ, それからその人とヒョンシクを本当の人間のようになっている, ヒョンシクに会ってその人ではないことに気づいて失望し, ああ, もうヒョンシクとは永遠に会えないのだわと失望したのだ。(原文朝鮮語)

- (7) ヨンチュエに対して義理による結婚をこのように明快に否定するなら, ヒョンウクはヒョンシクの方にも恩師の義理に縛られる必要がないことを認めなくてはなるまい。一ヶ月後車中でヒョンシクに会ったときの彼女が皮肉を言っている。これは, ヒョンウクがヨンチュエの悲しみに同情したこともあるかもしれないが, それよりもヒョンシクの内部にあるやましさ

クの何気ない言葉に投影されて、皮肉に聞こえたと考えられる。

- (8) 九〇節 全集1 一五六頁
- 『(前略) 지나간 일들랑 온통 잊어버리고 새로 모든 것을 시작하지요. (後略)』

- (9) 『無情』の研究(上)二、時間構成」の章において筆者は、意識は「過去の知覚」すなわち記憶であるというベルクソンの考え方を李光洙が受け入れていたことが、『無情』の變則的な時間構成に関わりがあるのではないかと述べた。

- (10) 一〇六節 全集1 一八〇頁
- 『용, 여대것 있고 있는 줄 알았더니 역시 잊은 것이 아니야요. 가슴속에 깊이 깊이 숨어 있는 모양이야요. (後略)』

- (11) 九四節 全集1 一六二頁

마치 애초부터 어둠고 좁은 움속에서 지내다가 처음 햇빛 있고 바람 불고 꽃 피고 새우는 세상에 나온 것 같다.

- (12) 同上
- 영제는 거문고를 타고 바이올린을 울린다. 그러나 그 소리가 모두 다 새로운 빛을 띤다.

- (13) 同上
- 인생에는 자유롭고 즐거운 빛은 세상이 있는 것을 깨닫고, 이의 비로소 영제는 자유로운 사람이 되고, 젊은 사람이 되고, 젊고 아름다운 여자가 된 것이다.

- (14) 二六節 全集1 五五頁

- (15) 一〇四節 全集1 一七七頁
- 인생은 즐거우려면 즐거울 수가 있는 것이다,
- 『이형식군 만세!』

- (16) 『春園研究』金東仁全集16 朝鮮日報社 一九八八 五七頁
- (17) 一〇五節 全集1 一七七頁
- 이제 만나면 서슴지 않고 물어보리라.

- (18) 一一一節 全集1 一八七頁
- 『아니요. 다만 그 일만 아니야요. 이 세상이 내린 수가 아니야요. 내 부모를 빼앗고, 내 형제를 빼앗고, 내 어린 몸 앞에선 괴롭히고... 그러다가... 그러다가 마침내 정절을... (後略)』

- (19) 一一二節 全集1 一八八頁
- 『(前略) 울지 말아라... 이 세상의 왜 행복을 아니 주어... 아니 주거든 내라지. 내라도 아니 주거든 의지로 빼앗지. 빼앗아도 아니 주거든 천수라도 잡지... 또 생각 해봐라. 이 세상의 너같은 실용을 당하는 사람이 너 뿐이었나? 더구나

三, ヨンチュエ (3)

1 ヨンチュエ의 救濟

『無情』の主人公はヒョンシクであるが、読者の胸にもっとも深い印象を残すのはむしろヨンチュエであろう。ヒョンシクが作者自身のいわば露悪的な戯画像であるのに対して、ヨンチュエは作者のつらいながらも忘れえぬ幼年時代、

ヨンチュエ・ソニョン・三浪津(波田野)

作者がほとんど原罪とも感じている妻、そして作者の運命共同体である民族を象徴してその伝統文化の香りすら漂わせている人物だからだ。そして、本稿(中)の最後で述べたように、作者は『無情』においてヨンチュエに未来をあたえることによって、自分自身も未来へむかっていくことを企図していた。⁽¹⁾

そのために作者はヨンチュエに自殺を思いとどまらせて東京に留学させ、つづいて民族のための奉仕活動という使命をあたえる。だが他の研究者によっても指摘されているように、ヨンチュエは決して明るい印象を残さない。⁽²⁾ 作者はヨンチュエを救うことに本当に成功したのだろうか、もし失敗したとするならその理由は何であったのか、またヨンチュエに残る暗い影は何を意味するのであろうか。

2 ヨンチュエは救われたか

作者がヨンチュエの「内的自我」を内部から崩壊させたのは、彼女を変化させるためであった。自分でこうだと思っている主観的な自己の姿ではなく客観的な姿と出会い、それを直視することによって初めて人は変わりうる、そう考えていたと思われる作者が、ヒョンシクの心が自分にならないことをヨンチュエに実感させたのは、彼女がその現実を認めたりえで力強く未来をきりひらいてくれるよう願っていたことだったはずだ。そのために作者は、ヨンチュエに人もうらやむ東京留学という道をひらき、このあと三浪津では、ヒョンシクの指導のもとで民族のために働くという使命をあたえる。だが作者が自分でヨンチュエにあたえたこの未来は、ヨンチュエにとって本当に望ましいものだったのだろうか。それならばヨンチュエはもっと明るい印象を残してもよいはずなのに、彼女が最後まで幸せそうに見えず、むしろ諦念と寂しさを感じさせるのはどうしてなのか。もちろん、長いあいだ願っていたヒョンシクとの結婚が永遠に不可能になった以上、ヨンチュエに寂しさが残るのは当然である。しかし作品の中だけでも、作者は幸せなヨンチュエのすがたを作り出すことができたのではないか。

ヨンチュエが残す印象の寂しさは、彼女がこのあと一生独身であろうという予感をいだけせるところからきている。同じように独身の予感をあたえるピョンウクが、それを理由にヨンチュエのような暗い印象を残さないのは、作者の描き方による。ピョンウクと違ってヨンチュエは独身の社会改良家という役割にそぐわない人間として造形されているのである。

花柳界という環境のためか、幼くして性に目覚めてウォルファに溜め息をつかせたヨンチュエは、⁽⁴⁾ 黄州で感性を開花させたときにも、まず男性のあたたかみを率直になつかしみ、身近にいる若い男性ピョングクに慕わしきを感じるような、ようするに異性ととの接触に敏感で、異性を必要とするタイプの女性として描かれている。第一夜、ヒョンシクの下宿から帰って自殺を決意したとき、「この腕はどうして想っていた人を抱くこともできず、この乳房はどうして愛する息子と娘に吸わせることもできないの、胸の中にあふれる情と愛を、想っていた人にあげることもできずに終わるの」と嘆き悲しむヨンチュエには、生身の女性のリアリティが備わっている。⁽⁵⁾

このようなタイプの女性として造形されたヨンチュエが幸せになる方法は、おのずから決まってくる。それは苛酷な自己変革と民族への奉仕の道ではなく、平凡な妻となり、母となる道だ。たとえばピョングクかウソンを独身に設定しておいてヨンチュエと結ばせれば、ヨンチュエは比較的容易にヒョンシクを断念し、幸せな妻と母としての人生を送ることができたことだろう。⁽⁶⁾ 内向的な彼女の性格からすれば、留学するよりもむしろこの方向こそが、彼女の再生のためには望ましかったように思われる。ところが作者は、ヨンチュエに伴侶をあたえるというストーリー展開をとらず、ヒョンシクの導く社会改良の一員として働くよう運命づけてしまった。ヨンチュエを救済することで新しい世界の再編成を企図したはずの『無情』において、彼女に最後まで暗い影がのこるのは、作者によってあたえられた独身の社会改良家という運命が、作者自身によって作られたヨンチュエの人物像から推して、彼女を幸せにしてくれそうにないからである。作者は、この方法で本当にヨンチュエを救えると考えていたのだろうか。

3 『無情』と『斗』

結論から言えば、作者はそう考えてはいなかったように思われる。民族への奉仕というヒョンシクの未来になかば強制的に統合されたヨンチェの未来が寂しさを漂わせているのは、作者の挫折感を率直に反映したからであろう。この挫折感も、『無情』から三十年をへて解放後に書かれた作品『斗』に、より明確にあらわれている。

『斗』は、いわば公的な自伝といふべき『斗의告白』と同じころに発表された自伝的創作小説だが、この二つの「自伝」はきわめて対照的である。淡々とした語り口で、「私が直接関連したこと、見聞きしたこと、接触した人々のことを書いた」『斗의告白』に対して、『斗』では作者の若き日の内面生活が露悪的といえるほど赤裸々に語られ、それに比例するように事実関係においては創作の要素が多くなっている。『斗』の序文で、李光洙は次のように書いている。

「私がこの物語を書くのは、世に光をあたえ香りを送ろうとすることではない。(そのようなことを、どうしてあえて望めよう。) あたかも醜悪な体をこの世からなきものにするため火葬場の焚口に入り、いやな臭いをもっと激しく漂わすのと同じである。臭いがいつとき出てしまえばもうしなくなるように、この物語で私の汚さを、いや汚い私を燃やしてしまわんがためだ。」

『斗』を書くことによって李光洙は、解放後の精神的危機を乗り越えようとしていたのだろう。自分の醜さを極大化し露悪的に描くことによって過去の自分を清算し、現在の自分を立て直したいという切実な欲求が、この文章からは伝わってくる。そして作品と自己とのこのような関係は、李光洙の最初の長編小説『無情』と結局のところ変わらないものであったように思われる。

『斗』は『斗・少年篇』六章と『斗・土平살 고개』二章の、二部八章からなる。『斗・少年篇』の第一章から第三章までは主人公キム・トギョンの出生と貧しい幼年時代、第四章は初恋の女性シルタンとの悲恋、第五章は父母の死、そして第六章では、教員時代の早まった結婚のいきさつと友人ムンの姉との情事が語られる。『斗・土平살 고개』では、前章「土平살 산골」に、学校での人事をめぐる葛藤からトギョンがついに校長になるまで、後章「明暗」には校長として民族のために奉仕するトギョンの姿が描かれており、最後は初恋の女性との偶然の出会いと別れで終わっている。

ところで、この『斗』全篇から『斗・少年篇』の最後の一章と『斗・土平살 고개』の二章、すなわちトギョンの教師時代の部分だけを取り出してみると、われわれは、『無情』との構図上の不思議な相似に気づくことになる。

まず女性との関係である。トギョンは妻、シルタン、ムンの姉という三人の女性と関わっているが、彼女たちからむしろ逃れたいと欲している。ヒョンシクとヨンチェの関係がそうだ。第二に「旅」の途中の「解放」がある。トギョンの「旅」は自転車で親戚の家々をまわる四日間であり、どの家もトギョンの過去と深く結びついている。この「旅」の途中、トギョンは妻が自分なしでも生きていけることを知った。子供を産んだばかりの妻は、夫が自分を厭っていることを察しており、「私は子供を育てて一人で生きてゆけます」と言ってトギョンを心理的に解放するのである。ヒョンシクは、幼年時代と結びついた古都ジョンヤンでの「旅」の途中、ヨンチェの「死」に安堵して解放を感じた。第三に「旅」から帰ると願望が成就する。旅から帰ったトギョンを待っていたのは校長の座であり、ヒョンシクを待っていたのはソニョンとの婚約と米國留学だった。内心で手にいれることを激しく望んでいたものであり、ともに露払い「ハン牧師」である。校長就任式の前のトギョンの心境は、ソニョンとの婚約を前にしたヒョンシクのそれに酷似している。

『無情』の一九一七年と『斗』の一九四八年、三十年の歳月をへだてて書かれた二つの作品の接点は、その舞台である五山学校である。『斗・少年篇』で出生時からの自分とその周囲のことを語ってきた李光洙が、第六章にいたって五山時代を回想しはじめたとき、そこに現れたのは、意識的にか無意識的にか、『無情』と同じ構図であった。再現

された構図の原因となった具体的な事実に関しては今となっては知るよしもない。しかし二つの作品を通して現れてくるこのような構図の存在は、われわれが『無情』という作品を理解する上で大きな助けとなってくれる。なぜなら『ト』においては明らかに、トギョンを愛した女たちに救済はなかったからだ。

4 『ト』におけるヨンチェ

『ト』の最後で、雪にまかれて庵にたどり着いたトギョンは、そこで初恋の女性シルタンに偶然出会い、二人きりで一夜を過ごすことになる。白痴に嫁したシルタンは数か月で寡婦となり、世をはかんで金剛山に行くところだった。トギョンはシルタンに、ピョンウクがヨンチェに対しておこなったような説得を試みるが、失敗する。説得が失敗した原因は明らかである。シルタンが求めたのはトギョンの愛であり、トギョンはそれに応えられなかったのだ。何事もおこらぬまま翌朝二人は別れ、尼になったシルタンは数年後に自殺する。トギョンの妻が死なないのは子供のためであり、ムンの姉が自殺しないのはキリスト教がそれを禁じているせいなのかもしれない。『ト』の主人公は、三人の女たちを救うことができなかったのだ。

『ト』には、執拗なまでにさまざまな寡婦たちが登場する。彼女らはそれぞれに不幸である。その不幸はあらたな伴侶をえることで軽減されるように思われるのだが、それは不可能である。再婚の勧めを匂わせたトギョンに、ムンの姉もシルタンも怒りに近い不快を表わしているように、彼女たち自身がそれを望まないのだ。彼女たちの再婚を妨害しているのは人間を内面から支配してしまった因襲である。⁽¹¹⁾

「因襲が長く時間をへれば良心になる」と、『ト』の中で李光洙は書いている。「夫が死んでも再嫁しないことはわが民族にとってすでに良心となってしまう、これに反抗することは良心の世界からとび出すのと同じである。」⁽¹²⁾寡婦は夫のあとを追って自殺するか、子供のために生きのびても異性に対する欲望を殺して守節するか、尼になるという道

しか残されていない。だが「最近は、」と李光洙は続ける。「最近、世のための事業に身をささげることもある。」⁽¹³⁾

「世のための事業」に身をささげることになったヨンチェは、結局のところ、尼になって自殺したシルタン、子供のために生きのびて守節した妻、宗教に救いを求めたムンの姉と変わらなかったのだ。このように人間が内面から因襲にとらわれてしまった社会において、心の夫に棄てられたヨンチェに幸せな未来などありえないことを作者は熟知していたのだろう。それは社会制度の問題というより、因襲を心の中で「良心」と化してしまった人間たちの、過渡期における悲劇であった。

『無情』において李光洙は、ヨンチェの「内的自我」を内部から壊した。だが、仮想的にせよ、その後のヨンチェにあらたな伴侶をあたえるという展開は、人の心が旧価値体系によってまさに感情の次元まで律せられていた当時の朝鮮社会においてリアリティをもちえず、共感を得られる可能性も少なかったのではないだろうか。このような社会で読まれる新聞連載小説においてヒロインを再嫁させるかどうかは、連載の成否にかかわる問題である。李光洙は当時、啓蒙論説文においては再婚を主張していた。だが、それを小説で実践させた場合、読者からはむしろ感情的な反発をうける恐れのほうが大きいことも知っていたと思われる。大衆の感情に迎合することが成功の必要条件であることは、ル・ボンの群衆心理を読んでいた李光洙にはわかっていたはずだ。⁽¹⁴⁾

それだけではない。論説では再婚を主張していた李光洙自身、感情面においてはそれを抵抗なく受け入れることは難しかったのではないか。彼もまた過渡期を生きた一人の男性であったことを、忘れるわけにはいかない。『ト』で、寡婦が当時の朝鮮でおかれていた状況を「良心」という語をもちいて説明する淡々とした筆致、一度嫁したシルタンに対してトギョンが示す冷淡な態度、「まして女性は、一度男性に接するとその血液までその男性の血が入って全身の組織に変化をひきおこすという」⁽¹⁵⁾、「他の動物は知らないが、人間は、その中でも女性は一生に一度だけ異性を愛するようになってきているように思われる」⁽¹⁶⁾などというトギョンの非科学的な考えを、つきはなすように書いてゆく作者の

態度からは、因襲から脱しきれず論理と感情のはざままで引き裂かれていた自分の当時のすがたをありのままに描こうという意志が感じられる。⁽¹⁶⁾

こうしてヨンチュエは自殺こそしないものの、彼女にふさわしい妻や母としての人生はあたえられず、社会への奉仕を使命として生きることになった。当時の人々の心を内面から束縛していた因襲の強さ、そして過渡期の人間である作者自身の論理と感情の不一致が、彼女に再婚を許さなかったのである。ヨンチュエは半処女のまま一生を独身で過ごすことによつてしか、当時の読者にとつても作者にとつても、ヒロインではありえなかったのだ。

5 ヨンチュエの不幸の意味するもの

純潔な妓生という二律背反的なヨンチュエのすがたには、処女寡婦であるムンの姉と、白痴に嫁してすぐ夫と死別し尼になったシルタンのすがたが重ねあわされる。ヨンチュエには、そのうえウォルフアによつて朝鮮の伝統文化という奥行きがあたえられており、李光洙が幼年時代に故郷の女たちによつて刻みつけられた古代小説と伝統詩歌の世界のはかなくも懐かしい過去の香りを漂わせながら、人の心をひきつけてやまない自己犠牲的な女性像をつくりあげている。そんなヨンチュエにたいするヒョンスクの「すまなさ」は、三人の女性にたいする「斗」の主人公トギョンの「すまなさ」と重なりあい、作者の何者かにたいする「すまなさ」を感じさせる。それが故郷に子供といっしょに残してきた作者自身の妻である可能性が高いことは、本稿(上)で指摘した。⁽¹⁸⁾ その場合、「無情」におけるヨンチュエの不幸は作者の妻の不幸を意味すると受け取ることができる。

彼女はおそらく、当時としてはごく普通の、二夫にまみえることを潔しとしない女性であり、夫がたとえ外で他の女性と結ばれても、自分を妻のままにしておいてさえくれれば、旧価値体系に支えられてそれなりに耐えてゆける「旧式」の女性だったのであろう。だが李光洙はよりよい自己実現をもとめ、教養ある女性との「新しい恋愛」を喪

踐するために、妻と完全に別れようとしていた。彼には妻を救う道は閉ざされていたのだ。ヨンチュエが最後まで幸せそうに描かれないのは、作者が自分の過去の責任を率直に表現したためである。自分の過去が失敗なら失敗のまま、で引きずってゆくことしか正直な生き方はないと、作者は考えていたのではないだろうか。⁽¹⁹⁾

先に述べたように、ヨンチュエはまた作者の民族を象徴する存在でもあった。⁽²⁰⁾ その場合、ヨンチュエの不幸の意味するのは朝鮮民族の不幸ということになる。それは植民地に転落した民族悲劇の象徴という意味にとどまらない。ヨンチュエは長年の守節の虚しさを感じ取り、これから何のために生きればよいのかわからずに、虚無感にとらわれている。ヨンチュエの「内的自我」は外的な力によつてではなく内部から崩れさり、いまや彼女は新たな自分を創造してゆくという困難を背負わされた。力を持たないために植民地に転落した民族は、ヨンチュエのように内部から自分のそれまでの姿を崩壊させ、自覚をもってあらたな民族に生まれかわらなくてはならない。だが、ヨンチュエの「内的自我」の内部からの崩壊が、ベ学監ら外からの破壊のときとは違う種類の悲しみと虚しさをもたつたように、民族も大きな痛みを経験しなくてはならないだろう。それはみずからの姿を直視し、それを現実としてひきうけてゆく痛みである。ヨンチュエのもつ暗い影は、朝鮮民族がこれから立ち向かわねばならない困難を、李光洙がどれほど重く見ていたかを反映している。一見楽観的に見える『無情』の結末が決してそうでないことは、終章において考察する。

最後に、ヨンチュエは作者自身のつらい過去をもあらわす存在であった。孤児になつて筆舌につくしがたい生活を送り、その後日本で孤独な留学生生活をすごした李光洙は、生のつらさをのりきろうとする衝動を創作動機としていたと先に述べた。⁽²¹⁾ ともすればあまりにもつらかった過去に引きずりこまれて生への意志を喪失しそうになるヨンチュエの虚無感、同じ作者がこのころ書いていた未来に対する希望を鼓舞する論説文とは違つて、人生の暗い面から目をそらすことができなない悲観主義を感じさせる。しかし、それゆえにこそ、この虚無感に打ち勝つためにこそ、李光洙は『無情』を書かねばならなかったのだ。世間の無情にこれ以上翻弄されなないためには死ぬしかないと泣きくずれるヨ

ンチュモ、世の中が幸せをよこさないなら奪ってでも幸せになるのよと勵ます。ンウクも、ともに李光洙自身だつたはずである。それならばンチュに最後まで残る不幸の影は、この虚無主義を完全に克服しえない作者自身の不幸を表わしているといえよう。そしてこのことは、作者が将来において宗教に沈潜してゆくことと、深く関わっているように思われる。

三註

- (1) 『無情』の研究(中)「一九九四『朝鮮學報』第百五十二輯」の最後で筆者は、「このあととはじまる作者とヒョンシクの世界再構築は、未来に進むための過去修復たるヒョンシク救済のこころみ、ソニョンという新しい女性との近代的恋愛の実験、そしてすでに述べたように、作者自身の自己発展と民族発展との統合という形で試みられることになろう」と本稿(下)の方向性を予告しておいた。
- (2) たとえば三枝壽勝の『無情』における類型的要素について「『朝鮮學報』第百七輯 一九八五」一二頁
- (3) 波田野『無情』の研究(中)「一〇五頁参照
- (4) 三三節 全集1 六四頁
- (5) 三五節 全集1 六九頁
- (6) 金東仁も次のように書いている。「もう一つ不思議なのは

어가서 고약한 냄새를 더 지독히 피우는 것과 같다. 한편 범새가 한겨번에 나고는 다시 아나 나는 것과 같이 이 야기로 내 머리맡을, 아나 머리를 나를 살라 버리자는 뜻이다.

- (10) 全集6 五二八頁
『나는 아를 기르고 혼자 살 수 있거든.』(後略)
- (11) 朝鮮で長く禁止されていた寡婦の再婚は甲午改革によって法律上は許可された。しかし長い間の習慣は人の心を束縛し、人々はいかかわらず女性の再婚に抵抗感を抱いていたのである。一九〇六年『萬歲報』に連載された代表的な新小説「血의淚」において李人植が日本の文明開化を礼賛した内容の一つが未亡人の再婚であり、また彼がすでに一九〇二年都新聞見習い時代に書いた日本語の習作「寡婦の夢」もやはり寡婦の寂寞を描いた作品であることは、当時の朝鮮社会における未亡人の問題の重要性をうかがわせる。なお「寡婦の夢」については田尻浩幸氏の論文「이인치의 都新聞見習時節」(高麗大学校国語国文学研究会 語文論集32輯)を参考にした。
- (12) 全集6 五六一頁
인심이 오래 묵으면 양심이 되는 것이다. (中略) 남편이 죽어도 재가를 못한다는 것은 우리 민족에게 이미 양심이 되고 말아서 이것을 반항한다는 것은 양심의 세계에서 뛰어나간다는 것과 같다.
- (13) 同上
우리 여성들이 취하는 길은 몇 가지 있었다. 하나는 남편

ンチュエ・ソニョン・三浪津(波田野)

はシン・ウソンとヒョンチュを結びつけなかった点だ。(中略) この男女こそお互いの性格もあい知識にも共通点が多く、いろいろな点から見ればねばならない人物だ。それにもかかわらず、作者はどうして二人を結びつけなかったのか。この小説の一部の目的が因習打破と新恋愛観樹立にあるということが否認できない事実である以上は、この点から見ても必ず結ばねばならないはずだ。(原文朝鮮語「金東仁全集16」六二頁)

- (7) 『나・少年篇』は一九四七年十二月、『나・스무살 고개』は翌一九四八年十月、『나의告白』は同年十二月に刊行されている。
- (8) 『나의告白』序文 全集10 五三九頁
내가 몸소 관련된 것, 보고 들은 것, 접촉한 사람들의 일을 썼다.
- (9) 全集10 五三六頁
내가 이 이야기를 쓰는 것은 세상에 빛을 주고 향기를 보내자는 것이 아니다. (어찌 감히 그것을 바라랴). 마치 이 추악한 몸을 세상에서 없이 하기 위하여 화장터 아궁이에 들

을 바라서 죽는 것이요, 들켜는 이성에 대한 욕망을 죽여 버리고 수절하는 것이요, 또 하나는 숨이 되는 것이었다. 요새 같은 세상은 위하는 사업에 몸을 바치는 일도 있다.

- (傍点引用者)
- (14) 波田野『無情』の研究(中)「七八頁参照
- (15) 同上 五八五頁
더구나 여자는 한번 남자를 접하면 그 열매에까지 그 남자의 피와 것이 들어가 온 몸의 조직에 변화물 이르킨다고 한다. (中略) 다른 동물은 몰라도 사람은, 그중에도 여자는 평생에 한 번만 이성운 사랑하게 마련된 것 같다.
- (16) 「無情」にもこれらとよく似た発想が見出される。「女性が男性と交われれば顔と体格に変動がある」(10節)あるいは「昔の小説には妓生になっても腕に驚血(処女の印)引用者注)が消えなかったという女がいた」(44節)など。
- (17) 『多難한 半生の 途程』全集8 四四六頁参照
- (18) 波田野『無情』の研究(上)「九八頁
본稿(上)四一頁で筆者は、李光洙は、意識とは記憶であり人間はそれを土台にあらたな経験に対応してゆく存在であるというベルタソンの考えを受け入れていたのではないかと述べた。それに従うなら、失敗や罪を意識から消すことなど本来できないことであって、罪を罪として率直に認めて忘却しないことこそ真摯な生き方ということになるだろう。ンチュエがヒョンシクの人生から離れないで生きるのは、作者なりの贖罪ということができるかもしれない。

(20) 本稿「1、3 ヨンチェ(朝鮮)の清涼里事件」参照

(21) 本稿「1、4 ヨンチェ(作者)の清涼里事件」参照

四、ソニョン(1)

1 見られるソニョン

最初の五日間、ソニョンはいわばヒョンシクによって見られる存在でしかない。本章では、この間のソニョンがヒョンシクにとって何を意味し、また作者にとっては何を意味していたのかを考えてみたい。

2 ヒョンシクにとってのソニョン

恩師の娘ヨンチェにたいしてヒョンシクがあれほど無情だったのは、ヨンチェと再会する数時間前に初めて出会ったソニョンに心を奪われてしまったせいだった。しかしながら『無情』の小説としての一つの弱点は、まさにヒョンシクのこの「一目惚れ」が読者に対してあまり説得力をもっていない点にあるように思われる。読者の多くは、ヨンチェと再会したときのヒョンシクが心の奥底で、「ソニョンがいるのになんでヨンチェがとびだしてくるんだ、ヨンチェなんか姦生か、誰かの妾になつてりゃいいんだ」と考えるほどソニョンに心を奪われていたとは、想像しにくいのではなからうか。最初の出会いで、たしかにヒョンシクはソニョンの美しさに深い感銘を受けた。そのときヒョンシクの内部には「あやしい炎」が燃えたつたと、あえてベルクソンの言葉を借用したり、初めて授業をおえたヒョンシクに夢の中を歩くようにして掃宅させるなど、出会いの衝撃の大きさを強調することに、作者としてはそれなりに心をくだいている。だが、それにもかかわらず、この出会いは男と女の宿命的な出会いを感じさせる何かを欠いている。ヒョンシクの内部に燃えたつた「炎」は、作者自身が「青年男女」が近くに接するとき飛び散る火花であるとわざわざ説明しているにもかかわらず、むしろ違った種類の衝動を感じさせるのである。

ソニョンと出会うまえ、「まだ独身であり、他家の女性と近しくしたことがない」ヒョンシクはひどく緊張していた。ところでこの緊張感同じくらしい印象的なのは、ヒョンシクが金長老の富から受ける重苦しいまでの圧迫感である。途中で会ったウソンが、ソニョンは美人で才媛だという情報でヒョンシクの期待をおおったあげく、「君の力じやどうかなるってわけでもなからうが」と皮肉な言葉を残して去ったあと、再び金長老の家に向かうヒョンシクは、自分には金もなく、学歴も中等学校卒業で、そのうえ教会での信用もさほど大きくないから、当世の女性の気をひくことはできないという自己卑下と、それで、目上のものへつらつて羽振りをかきすような軽薄な輩と自分は違っているのだという自尊のあいだで葛藤する。ヒョンシクは地位や財産にはとらわれたいと自負しているが、その強調の執拗さ自体に、ヒョンシクの中にある富と地位へのコンプレックスが見え隠れしている。金長老の豪壮な家に着いたとき、ヒョンシクは「地位と財産の圧迫」を感じ、「ごめん下さい」という声も心なしか震えてしまう。家の中に入れば西洋風の豪華な家具があり、氷を浮かべた飲み物がまわっている。すっかり萎縮したヒョンシクの前にあらわれたソニョンは、その美しさとともに父の金長老がもつ「富」によってヒョンシクを魅了したのである。

人間が人間と出会うことで、互いの心はあるいは惹きつけられ、あるいは反発して「魂の帯電」を引き起こす。それが悲劇の源泉である「情念」だとベルクソンは言った。李光洙はベルクソンのこの言葉を、ヒョンシクとソニョンの出会いの場で、「情念」を「あやしい炎」におきかえ、形を少し変えて借用した。だがソニョンという人間に出会う以前に、すでにヒョンシクの心には「富」による帯電が引き起こされていたのではないだろうか。ソニョンを見たヒョンシクの心に燃え上がったのは、若い男が美しい女に接近して燃えさせたエロスの炎である以上に、社会的上昇を夢見る若者がチャンスに遭遇して燃えさせた野心の炎であつたように見える。

この日ヒョンシクの表面の意識には、金長老がこれから米國留学をさせようとしている一人娘の家庭教師として自分を選んだことに、何か特別の意味があるのではないかという疑問は、いっさい浮かんでいない。しかし、さきほど

ウソンが冗談に発した「婚約、エンゲージメント」という言葉が、ヒョンシクの耳に「奇妙にうれしく聞こえ」たのは、なぜだろう。ヒョンシクも心の奥底では、今回の金長老の依頼の意味について想像をたくましくしていたからではないか。いくら西洋かぶれの金長老でも、嫁入り前の一人娘を若い男性と近づけるといふ、当時としては破格の行動をとることには、かなりの決断を必要としたはずだ。作者は、金長老が多くの人の意見を聞き、かつ自分の目で確認したうえでヒョンシクの人格を信用してこの依頼をおこなったこととわっている。実は娘に米国まで同行してくれる婚約者さがしでもあったこの調査が周到を極めたであろうことは、想像にかたくない。金長老のこのような動きにたいして、ヒョンシクがまったく無頓着であったとは思われない。この日、金長老の家にソニョンの家庭教師として招かれた事実によって、ヒョンシクの野心はすでに点火されていたと考えられる。

ヒョンシクとソニョンの出会いがより劇的になるのを妨げているのは、この日金長老の家で出会ったもう一人の少女スネの存在である。スネは「両親がなく家もない可哀相な」少女で、ソニョンの勉強友達として金長老の家で世話になっている。金長老がスネも一緒に勉強するよう命じたのは、未婚の男女を二人きりにするのをふせぐためである。ヒョンシクはスネの顔に、若いときから世間の苦勞をなめてきた人間に特有の陰りを見出し、親近感と同情を覚える。京城でも屈指の金持ち金長老の一人娘であるソニョンは、さつきウソンが笑いとばしたように、ヒョンシクにとっては高根の花であり、身分的にはスネのほうがヒョンシクにふさわしい。ソニョンも内心この二人が結ばれることを考えたほどである。読者は、うつむいてヒョンシクを見ようともしないソニョンよりは、むしろ、ヒョンシクと同情のまなざしを受けとめて静かに見返すスネの方に、男女の「出会い」を感じるのではないだろうか。

しかしながら、自分と同じく顔に世間の無情を刻印されたスネにヒョンシクが惹かれることは、ありえないことであつた。なぜなら、ヒョンシクはまさにその世間の無情を見返すためにも、社会的に上昇することを切望していた青年だつたからだ。のちにヒョンシクはこの日のことを回想し、自分がヨンチュエでなくソニョンに惹かれたのは、彼女

のもつ「富と教育」がヨンチュエとは比較にならなかつたからだと自己分析している。⁽⁹⁾ 先覚者を自任するヒョンシクに必要であるにもかかわらず欠けている「富」は、たちどころにヒョンシクの心を惹きつけた。したがって「教育」はソニョンと同程度でも「富」をもたないスネがヒョンシクの心を捉えることは、不可能だつたのである。

ソニョンを前にしたヒョンシクの心に燃え上がった「あやしい炎」は、純粹にソニョンという女性に「目惚れしたエロスの炎というよりも、すべてを手に入れてのしあがりたいた願う欲望の炎であつた。結局のところヒョンシクは、このころ作者が論説文で主張していた「貧賤に甘ん」ぜず「小成に安ん」ずることなく「巨富」を追及する「大欲望」をもつた青年として造形された人物であり、そのヒョンシクにとってソニョンは、美人で才媛であると同時に米國留学を可能にする「富」を持っていることによつて欲望の対象であつたのだ。

3 作者にとつてのソニョン

『無情』の展開から見れば、ソニョンがヒョンシクに対して意味したものは、美しく教育ある女性と米國留学であつた。それでは、作者にとつて、ソニョンは何を意味していたのだろうか。答えをうるために、われわれは、『無情』と相似する構図をもつた三十年後の創作自伝『ナ』をもう一度見ることにしたい。ヨンチュエの場合と同じく、『無情』の中でソニョンの意味していたものが、そこに形を変えてあらわれているからだ。

ヒョンシクが手にした米國留学は、『ナ』においては、トギョンが得た校長の座と見なすことができる。そして美しく教育ある女性ソニョンは、まだ見ぬ恋人「イム」に該当する。家庭生活にも学校生活にも疲れ果てたトギョンは、すべてを打ちすてて放浪の旅に出ることを夢見ながら次のように考える。

「そうだ。どこから見ても俺は非常に優れた人間なのだから、いま一緒になっている妻や、シルタンや、ムンの姉や、こういう連中は全部浮かんでは消えてゆく塵にすぎないのだ。俺にめぐってくる大きな名誉がまだあちらの未来

の雲の中にかくれているように、俺の一生の恋人となる優秀で徳があつて才能ある女性も、どこか知らないがとても清らかなところで、陽の光と露をうけて香りをたっぷりと含んだ蕾をつけてかくれているのだ。(12) (傍点引用者)

「L」では、トギョンは校長という「大きな名譽」は得たものの、「一生の恋人」は夢想のままで終わっている。雲をながめながら因縁の見えぬ糸にむすばれた「イム」を夢想したトギョンのように、五山学校時代の李光洙も定州の空を見ながら自分にふさわしい女性を夢見たのだと想像される。近代 self 自我に目覚めた一人の若者として、自我に自我をもって応える「靈肉合致」(13)の恋愛を李光洙は求め、そのためには相手の女性に、まさにヒョンシクがヒョンチュエに対して心配したように「自分の愛をわかってくれるだけの学問」(14)が必要であると思われたのだから。

自分のまわりに「自分の愛をわかってくれる」相手のいない寂寞は、ウォルフアの次のような壮大な嘆きにも表れている。

「ウォルフアは盛唐時代の江南に生まれなかつたことを恨んだ。卓文君は自分であるのに、鳳凰曲で自分を魅了する司馬相如なきことを恨んだ。ウォルフアの思うに、天は大同江を下したがゆえに、牡丹峰を下した。しかるに、ケ・ウォルフアは大同江であつても誰が牡丹峰として、春は花、秋は紅葉でその面影を浮壁樓の前に映すのか」(15)

古風であるがその切なさが胸をうつウォルフアの悲しみは、五山における作者の悲しみでもあつたのではなからうか。ヒョンシクがソニョンに一目惚れしたのは、金長老のもつ「富」のほかに、「教育」であるソニョンには「イム」になりうる可能性があつたためだ。「富と教育」をあわせもつソニョンは、それゆえ作者にとっては、五山で夢見た「大きな名譽」と「一生の恋人」の二つを意味する存在だつたと考えることができる。

4 ヨンチュエの清算

われわれは本稿(中)において、妻と五山学校をすてて東京に再留学を果たしている作者の時間的位置は、作者自身の投影人物であるヒョンシクが、ヨンチュエと学校から解放されてソニョンと婚約する五日目にあることを考察した。それゆえ作者の構想としてはヒョンシクが最終的にソニョンを得て留学することは当初から決まっております、そのための手続きとしてヨンチュエをすて、京城学校をやめることが課題となつていたのである。

ソニョンと出会つたヒョンシクが、彼女と結ばれて「巨富」をうるには、まだ登場していないヨンチュエの清算が必要とされる。こう考えてくると、ヒョンシクがまずソニョンと出会い、その後でヨンチュエと再会するという順序設定は、もう一つの意味をおびてくる。すなわち、ソニョンと出会つたからこそ、ヒョンシクにはヨンチュエとの再会が必要になつたと考えられるのだ。ソニョンと彼女の「巨富」に点火されてヒョンシクの内部で燃え上がった炎がヨンチュエという影を作り出し、炎のゆらぎに誘発された夢の中でヒョンシクはヨンチュエを清算するのである。

ソニョンの美しさにほろつとなつたヒョンシクは「まるで酒に酔つた人のように何も考えず、どこに行くかもわからず、ただ一年あまり通つた習慣によつて家に帰つた」(16) として夢の中を歩くようにして下宿に戻つたヒョンシクは、暗い下宿でヨンチュエと再会し、同時に心の奥底で彼女から逃れたいという願望をいだく。そしてその願望が、ヒョンヤンで成就したとき、さつさとヨンチュエの捜索を打ち切つて夜汽車に乗つたヒョンシクは、「夢から覚めたようだ」(18)と何度も笑う。ソニョンとの出会いで野心の炎を燃え上がらせたヒョンシクは、成功のために何かの清算をせまられたと感じ、ひとつの夢を見たのだ。夢は願望を充足させる。こうしてヒョンヤンの旅でヨンチュエから解放されたヒョンシクを待っていたかのようにハン牧師が来訪し、ヒョンシクはソニョンと米國留学を手にしたのである。

四、註

(1) 七五節 全集1 一三三頁

선형이 가 있는 데 왜 영체가 귀어나왔나, 영체가 기생이거 나 귀체가 되었으면 좋겠다

ヨンチュエ・ソニョン・三浪津(波田野)

(2) 本稿(上)六一〜六二頁参照

(3) 三節 全集1 一八〜一九頁

그러면서도 알 수 없는 것은, 가슴속에 이상한 불길, 이 일 어남이 아니는 청년, 남자가 가까이 접할 때에 마치 음전과

양견이 가까와 지기가 무섭게 서로 감용하여 불꽃을 날리는 것과 같이 면치 못할 일이며, (傍点引用者)

(4) 一節 全集1 一五頁

이 형식은 아직 독신이라 남의 여자 와 가까이 교제하여 본 적이 없고,

(5) 同上 一六頁

『허허, 그가 유명한 미인이라네. 자네 힘에 견질 되겠다 마는 잘 물어보게. 그러면 또 보게.』

(6) 二節 全集1 一七頁

형식은 지위와 재산의 압박을 받는 듯해 일변 무섭기도 하고 불쾌하기도 하면서, 소리를 가다듬어, 『이리 오나라.』 하였다.

(7) 原文は electrification de l'ame. 一九一四年の廣瀬哲士訳は「靈の電氣」一九三八年の林達夫訳(岩波文庫)は「精神の電化」としている。本稿(中)六二頁參照

(8) 二節 全集1 一六頁

미인이라는 말도 듣기 싫지 아니하자니와, 약혼이나 인제 이지먼트란 말이 이상하게 기쁘게 들린다.

(9) 三節 全集1 一九頁

『이 애가 순앤데 내 딸의 친구여. 부모도 없고 집도 없는 불쌍한 애여.』

(10) 一〇七節 全集1 八一頁 本稿(上) 四四〇四五頁參照

(11) 『教育家諸氏에게』全集10 五九頁

(12) 全集6 五四一頁

그렇다. 어디로 보든지 나는 대단히 잘난 사람이지 그만 내 아내나, 실단이나, 문의 누님이나, 이런 것들은 다 지나가는 한 티끌에 지나지 못한다. 내게 돌아올 큰 명에가 아직도 저편 미래의 구름속에 잠추어 있는 모양으로 내 평생의 애인이 될 잘나고 덕 있고 재주 있는 여성도 이 단지 모르나 극히 깨끗한 곳에서 빛과 이슬을 받으며 향기 물 담뿍 담은 봉오리를 짓고 숨어 있는 것이다.

(13) ヒョンシクのもとに届いたヒョンシクの手紙にある次のような一節は作者自身の恋愛観とみてよいと思われる。「つまり僕が要求するのは精神的とか肉적とかという部分的な愛ではなく、靈肉を合わせた全人格の愛であることに気がついたので。」(原文朝鮮語 九七節 全集1 一六六頁)

(14) 一二節 全集1

그러나 만일 영체가 지금껏 아무 것도 배운 것이 없으면 어찌나. 내 마음과 내 사랑을 알아 줄 만한 공부가 없으면 어찌나.

(15) 三二節 全集1 六二〇六三頁

월화는 성당시대 강남에 나지 못한 것을 한하였다. 학문은 자기언마는 봉황곡으로 자기말 후리는 사마상여의 없음을 한하였다. 월화의 생각에는 하늘이 대동강을 내시매, 모란봉을 또 내쳤으니 제월화는 대동강이 되려니와 누가 모란봉이 되어 봄에는 꽃으로, 가을에는 단풍으로 그 그림자를 부벼루 앞에 비치리오 하였다.

(16) 本稿(上)において筆者は、二人の女性との出会いの順序がソニョン選択に大きな役割を果たしているというヒョンシク自身の分析を考察した。(四四〇四五頁)

(17) 四節 全集1 二〇頁

마치 슬픈 사람 모양으로 아무 생각도 없이, 어디로 가

는지도 모르고, 다만 일년이 넘어 다니던 습관으로 집에 왔다.

(18) 六四節 全集1 一一七頁

「꿈이 깨듯하다」

五、ソニョン(2)

1 見る、ソニョン

前章では、ヒョンシクによって見られる、ソニョンが、ヒョンシクと作者にとって何を意味したかについて考えた。本章では、ソニョンが見る、側に転じてしめす変貌と、その変貌の様相にあらわれた作者の意識を検討したい。

2 ソニョンの変貌

二日目、ヒョンシクから英語の授業を受けながら、米留学と未来の夫を想像しているソニョンを、作者は「暖かな春の朝に咲いた花」に比している。『無情』の主人公が出会った「いまだ風も知らず雨も知らず古いも知らず枯れ落ちることも知らない、真っ直ぐに咲き出した花」ソニョンは、『나』の主人公が夢みた「どこかは知らぬがとても清らかなところで、陽の光と露をうけて香りをたっぷりと含んだ蕾をつけている」る「イム」の延長線上にいる。しかし、暖かい春の朝にひらいた蕾を雨や風が待っているように、ソニョンもこれから「人生」という火の洗礼」を受けねばならない、自分と外界がいかなる「関係」にあるのか、そもそも「関係」があるかないかさえ考えたことのないソニョンは、いかなれば納屋に置きっぱなしの「機械」であるのか、今では静かな海のようなソニョンの心にやがて暴風が到来し、「空から大風が吹きよせ、この海の水を底から揺り動かしてそこうねりを作りだし泡だ

たせ流れを生じさせ」たとき、ソニオンはようやく「真の人間」になるのだと、作者は予告する。

それでは暴風はどんなふうにならぬか。五日目の朝、金長老からヒョンシクとの婚約をにおわされたとき、ソニオンの胸にそれほど波風は立たなかつた。そのあとスネと交わした会話を見てもわかるように、ソニオンはただ「どうしてよいかわからない」と戸惑っているだけである。ヒョンシクに対しては、「どちらかといえはいい人だという気もしており、そのうえ朝、父の言葉を聞いてからは、前よりもうちよつといい人のような気がしてきた」とあるように、無関心よりは好意の方に近い気持ちであった。婚約後、毎日顔を合わせるうちにソニオンは次第にヒョンシクと心を通わすようになっていき、一時は、あいかわらず不幸そうなスネに対して同情とけむたさの入り交じった感情を共有するまでになる。ところが、そこに飛び込んできたヒョンシクの醜聞が、ソニオンの胸にはじめて波をひきおこした。父母の会話を立ち聞きし、ヒョンシクとウォルヒヤンの醜聞を知って不快を感じたソニオンの心は、ヒョンシクを「前と同様いい人」と思う心と、「同時に憎らしいという思い」とに引き裂かれ、はじめて「ソニオンの胸には苦痛が生まれ」たのである。それとともにソニオンの胸にはさまざまな思いがわいてくる。「空想! 空想! なぜ作者は登場する全部の人物をかくも空想好きな人間にしたのか。われわれが知っているソニオンは少し鈍感で信じやすい女性だったはずだ」と、金東仁は苛立ちの声をあげるが、むしろ作者の意図は、そんな女性だったソニオンが、何をきっかけとしてどのように変貌してゆくかを描くことにあつたと考えるべきであろう。

社会的地位と容貌の点でヒョンシクは自分にふさわしくないし、もともとヒョンシクは自分の好みのタイプではなかつた、自分はヒョンシクに「かわいそうだ」という気持ちしか抱いたことがない、とソニオンは考える。しかしながら、「今まで彼をいい人だと考えたこともないし、いわんや好きだと思つたこともなかつた」というソニオンの回想を、文字通りに受け取るわけにはいかない。このときソニオンは婚約の日の自分の気持ちを、「かたや驚き、かたや失望した。ヒョンシクのような人を自分の配偶者にしようという父親がうらめしく、不快でもあつた」と思い返しているが、先に見たように、実際にはその日のソニオンは戸惑うだけで何も考えなかつたし、ヒョンシクに対してはむしろ「いい人」という好感をいだいていた。この回想は、ヒョンシクの醜聞によって自尊心を傷つけられたソニオンがおこなつた、過去の記憶の歪曲と取るべきであろう。好きにならなかつたヒョンシクに醜聞があつたと知つたとき、ソニオンはヒョンシクを信じることで彼との関係を強めようとはせず、ヒョンシクの地位や財産、学歴、容貌を貶めることで自尊心を守ろうとしたのだ。

ここでようやくソニオンはヒョンシクから見られるだけの存在ではなくなり、自分からもヒョンシクを見るようになったと言ふことができる。だが、ソニオンのまなざしがヒョンシクを見つめはじめたとき、その判定基準となつたのは財産や学歴など、彼女が育つた環境の支配的価値観であつた。ソニオンが受けた「教育」は、彼女の虚栄や自尊心の抛り所となるだけで、ヒョンシクの自負する人格や知識をみきわめる役には立たず、彼女の「富」は、人間をその所有するものの多寡によって判定する傾向を生み出したのである。

ソニオンがヒョンシクに見られる側からヒョンシクを見る側へ転じたのと歩調をあわせるように、ヒョンシクも見られる、自分を意識するようになる。夢のようにソニオンを清算したヒョンシクは、婚約後も「夢のように楽しく」過していたが、そこに伝わつた醜聞がヒョンシクの夢を破つた。ヒョンシクの生活は、急に現実の色彩をおびる。金長老夫妻の態度は冷たくなり、この結婚が「仰婚」(家柄が上の相手との結婚)であるという現実が、ヒョンシク自身にもはつきりする。夢の中ではソニオンを一方的に見るのみであつたヒョンシクは、ようやく見られる自分を意識し、彼女にどのように見られているかを知りたい焦燥にかられる。ソニオンはようやくヒョンシクにとっての「他者」としてたちあらわれたのである。ソニオンによってどう見られているかという疑問、それは自分がソニオンによって愛されているかどうかという疑問にはかならない。

このあとソニオンとヒョンシクのあいだにくりひろげられる愛と自尊心の葛藤は、まるで読者のための「近代的恋

愛」のてはどきのような。ヒョンシクの心を苦しめるのは、金長老の決定とハン牧師の仲立ちによって成立したソニョンとの婚約が自由な恋愛の結果ではなく、それどころか自分とソニョンを結びつけているものは、むしろ父の命令という旧価値体系の権威だという事実である。ヒョンシクはソニョンの口から、直接、自分を愛しているという言葉を聞くところ。ところが、「妻になったから夫を愛するのですか、それとも愛するから妻になるのですか」⁽¹⁶⁾というヒョンシクの質問の意味をソニョンは理解できず、「同じことじゃありません」と答えて、ヒョンシクをがっかりさせる。

ヒョンシクとソニョンのちぐはぐなやりとりは、初めて西洋風の恋愛というものが伝わったころの朝鮮社会の雰囲気想像させる。こんなソニョンの態度は、それまで近代的な恋愛感情というものを知らなかった若い読者にとっては、いかにもありそうで、感情移入しやすいものであったのではなからうか。とりわけヒョンシクの愛の求めにソニョンが感じる心のゆらぎは、西洋風恋愛に初めて出会った一九一〇年代朝鮮の教育ある女性の戸惑いを感じさせる。「愛」という言葉を聖書でしか知らなかったソニョンが、「私を愛していますか」という問いに当惑し、「愛」がなければ父母の命令でおこなった婚約も無効であるというヒョンシクの言葉に恐れをいだいて、思わず「はい」と答えてしまふ場面や、思い切ってソニョンの手を握りしめてからヒョンシクが逃げるように帰ったあと、汚らわしうにその手をチマで拭いたソニョンが、ふと握られたときの恍惚感を思いかえし、微笑んでそっと手にキスしてみるところなどは、それまで知らなかった男女間の情感に少はず目を開いてゆく女性のすがすがしい目に見え、ヒョンシクの醜聞を契機として見られるだけの存在から見る、側に転じたソニョンは微妙な変貌を示しはじめ、その変貌はやがて「火の洗礼」によって不吉な様相を呈することになる。

釜山行きの汽車の中で、ヒョンシクからヨンチュエとのいきさつを聞かされたソニョンは、恐ろしいほどの嫉妬に襲われ、ソニョンの胸の中には暴風が吹き荒れる。

「自分の内臓全体がじりじりと燃え、鼻からは真っ黒な炎がめらめらと出てくるような気がする。

激しい自分の息づかいは、まるで、かたわらに何か大きな魔鬼がよりそって、フッフッと冷たい息を吹いているようだ。自分の体が、あたかも聖書をならったときに想像した真っ暗な地獄にただよいながら入ってゆくように思われる」⁽¹⁹⁾

そんな異常な心で見ると外界も違って見える。車内の人々は「すべて恐ろしい魔鬼」⁽²⁰⁾であるし、ヒョンシクがヨンチュエと抱き合っている幻影も見える。ソニョンは祈りの言葉を唱えることで、ようやくその状態から脱することができた。

ソニョンの内部で猛威をふるう「嫉妬という毒菌」は、作者の言うように「愛という毒菌」⁽²¹⁾であり、それゆえソニョンの嫉妬はヒョンシクに対する愛の一つの形であると言えることができる。納屋に置きっぱなしの「機械」でしかなかったソニョンは、ヒョンシクへの愛に目覚めることで、はじめて外界との関わりをもつことになったのである。契機となったのは、外界をありのままに見ることを妨害して彼女を袋小路に追い込んでしまいかねない危険な「毒菌」であったが、自分の意のままにならない他者の心に苦しみ、それに触発されるように勝手に動く自身の心に戸惑いながら、ともかくもソニョンは自分という存在と他人という存在、そしてその「関係」に目覚めてゆく。

3 ソニョンの変貌様相にあらわれた作者の意識

「火の洗礼」によって、ソニョンはヒョンシクやヨンチュエとは違った形で、人間として、女性として生きはじめた。だが黄州のビョンウクの家で美しい自然や音楽に囲まれて自我に目覚めてゆくヨンチュエと比べると、嫉妬に燃える自分のすがたにおののきながら愛に目覚めるソニョンは、どう見ても美しく描かれているとはいえない。誇り高く、我

欲と虚栄心が強く、嫉妬深いソニョンは、人間の醜い面をヨンチュエよりも多く配分されているように見える。「富」も「教育」も持ち、そのうえヒョンシクに愛されている「新式女性」ソニョンが見せる嫉妬の醜さと、何ものも持たずにヒョンシクに捨てられた「旧式女性」ヨンチュエが見せる諦念のけなげさのどちらに読者が魅力を感じるかは、明らかである。

ソニョンの変貌の不吉な様相は、将来の夫婦生活がヒョンシクにとって平坦でないことを予想させる。この二人の将来は指摘されているように『書』(一九三二)における許崇・尹貞善夫婦の破綻を思わせる不安な要素をもっているし、ソニョンの嫉妬の激しさは、この感情のために自分をおいこみ夫も破滅させてゆく『有情』(一九三三)の主人公の妻を想起させる。作者李光洙の「一生の恋人」を反映する登場人物であった清らかな「イム」は、何ゆえこれほどまで不吉に変貌してしまうのか。

ソニョンの変貌は、「近代的恋愛」に付随する自我葛藤に対して作者がいだいた拒否感を反映しているのではないだろうか。ソニョンの不吉な変貌は、彼女が見られる存在から見る存在に転じたときにはじまった。京城学校の学生たちが自我に目覚めるとともに「他者」としてヒョンシクを見つめ断罪しはじめたように、ヒョンシクを見るようになったソニョンは、ヒョンシクを見つめて判定する対等な一つの自我であり「他者」である。二つの自我は、ぶつかりあって相手を客体化する。ヒョンシクは京城学校をやめることで、学生たちとの不愉快な自我葛藤から逃れたが、ソニョンからは逃れられない。なぜなら、ヒョンシクをソニョンに結びつけているのは、彼女の「富」の他に、まさに彼自身が欲する、自我に自我をもって応える「近代的恋愛」だからだ。「近代的恋愛」が不可避的にまねくこの自我葛藤に対して作者が感じた嫌悪が、ソニョンの描き方に反映されたのではないかと考えられる。

このことは、ヒョンシクと同じく作者の分身であって作者にとってもヒョンシクにとっても「他者」ではありえないヨンチュエが美しく描かれることも関わってこよう。ヨンチュエがヒョンシクを恨む心はすぐさま運命と世間に拡散されて、ヒョンシク個人への憎悪として凝固せず、「万事がもう過ぎてしまったのだから、ここにきて嘆いても仕方がないし、はらいせをしたって仕方がない。むしろヒョンシクに笑顔で対し、あちらの心なり楽しくあげた方がよい」と、ヨンチュエは心の中であきらめてヒョンシクを許す。ヨンチュエは母のようにひたすら彼を受け入れて許す存在なのだ。

ヒョンシクにとって他者でありえず、したがって「近代的恋愛」の相手になりえないヨンチュエを美しく描き出し、逆にソニョンを不吉に変貌させたところに、われわれは作者自身がかかえていた「前近代性」あるいは「過渡性」とでもいふべきものを見ることができるよう思う。

4 「近代的恋愛」の実験

「近代的恋愛」、それは西洋から東洋に主として文学を通じて伝わった、男女間の情愛の新しい形である。東洋に存在しなかったこの新たなタイプの恋愛は、「近代」が個人を単位とした市民社会を前提としているのと同様、個人の自由意思による結びつきを前提とする。結婚が個人ではなく家単位の問題であった東洋の社会において、それゆえこの恋愛感情は当然のことながら軋轢をひきおこすことになった。有機的にすべてが旧価値体系によって律せられている社会で、結婚制度だけが突出して変わることはできない。「近代的恋愛」は、男女間の情愛というナイーヴな側面から社会制度の根幹たる結婚制度を衝いて社会全体の「近代化」を要求するラディカルな面をもっていたのである。論説によって結婚制度をはじめとする朝鮮の旧制度をさかんに攻撃していた李光洙は、その一方で『어린 벗에게』『開拓者』などの「恋愛小説」によって、この新しい感情を読者に疑似体験させ、伝播させようと努力した。

現在のわれわれの目には幼稚に見えるこれらの小説の主人公の大袈裟な恋愛は、当時としては非常な覚悟を要する行為だった。ほぼ十年のち、『어린 벗에게』を収めた『젊은 꿈』の序文で、李光洙はこの作品を書いた当時をふ

りかえって、「今となってみれば、一人笑いするところもあるし幼稚なところもあるが、すべて手をつけずそのままにしておいた。それは私の命のひとかけら——若い夢のひとかけらであり、とても触れる気になれないからだ。考えてみれば、そのころ私は火のような熱情があり、限らない希望があつた」と述べている。

大陸放浪を終えて五山にもどり、『어린 벗에게』を書いてまもなく「火のような熱情」と「限らない希望」をもって東京に再留学したときの李光洙には、「近代的恋愛」を自分自身で実践しようという野心と憧れがあつたと想像される。それまで朝鮮に存在していなかった新しい情愛による男女の結びつきは、李光洙個人の野心であると同時に旧価値体系に律せられた社会への反抗でもあつたがゆえに、個人の欲望追及と民族の発展追及との幸福な一致であるはずだった。ところが彼に妻子がいたことが問題を複雑にした。民族への奉仕が、李光洙個人の欲望追及の理由づけに使われる可能性が生じたことになったのである。

結婚当初から妻を愛することができずに苦しんでいた彼が、真に理解しあえる人生の伴侶を求めることは、まったく個人的な問題であるべきだが、当時の社会でそんな論理が通るはずはなかった。もしこれが親の定めた結婚で親が健在であつたなら、李光洙といえども最初の妻を捨てることはできなかったであろう。この結婚は親のいない彼自身が決めたものであつただけに、相手の不幸に目をつぶりさえすれば離婚は不可能ではなかった。ただ対外的というよりむしろ自分自身の問題として、李光洙はこの行為に正当な理由を必要とした。自身をモデルとした『金鏡』の中で、「金鏡には自分の行為にあってあれ高尚な意義をつけなくてはおさまらない癖がある」と書いたように、李光洙はそのような「癖」があつた。こうして、自分の「近代的恋愛」の実践は民族の「精神的革命」に寄与するという独特の論理が出てくる。李光洙が民族のために働きたいという気持ちに不純なものがあつたとは思わないが、それがそのまま個人の欲望追及の意義づけに使われるとき、一種の曖昧さが生ずるのは避けられない。この論理を「すり替え」と指摘する論者もある。李光洙自身も自分の「癖」に気づいていたほどであるから、その論理の曖昧さも意識はして

いたのであろうが、おそらく彼はそれを押し殺したのではないだろうか。

李光洙は、自分自身とともにイ・ヒョンシクにも、「同胞」のための「近代的恋愛」を行わせようとする。『無情』の中で作者が直接おこなう生硬な恋愛論の力説や、まるで至上命令を実行するようなヒョンシクのぎこちない恋愛感情の描写からは、恋愛に対する作者の過剰なまでの思い入れと使命感が伝わってくる。『無情』には、ソニョンの側の心の動きとともに、ヒョンシクの側からのソニョンへの恋愛感情がこまかに描かれているが、ソニョンの場合と同様、それらは読者に対する「近代的恋愛」感情のレッスンといふことができる。たとえばソニョンに見られる自分を意識し、彼女に愛されているかどうか知りたくて焦燥したとき、ヒョンシクは極端な自己卑下におちいる。それまでの伝統的な男女関係においては想像することもできなかった、男性が女性のままで額づかんばかりのこの自己卑下は、「愛の前ではすべての嬌慢と自尊心が失われてしまふ」という、新しい恋愛の命題の実行である。朝鮮文明の礎石となるのだという民族的使命すら恋人の愛をうることに比べれば「さほど重要ではない」と言い切るヒョンシクの誇らしいまでの愛の苦悩は、男女の愛情がそれほど重要であるとは想像もしなかつた当時の人々にとって、さぞ衝撃的であつたことだろう。このように極端な恋愛感情の表現は、儒教界だけではなく当時の愛国志士の気風をも逆なでするものであつたはずだ。かくも挑戦的な言辞をあえてヒョンシクに弄させているところに、作者の当時の気負いを感ずることができる。

だが命題の実行のようなヒョンシクの恋愛感情には、自然にはとばしり出るエロスが感じられない。そのうえ、いっときは痛快なまでに個人に徹するように見えた彼の恋愛は、結局はそれに徹しえずに「民族」のまえに屈することになった。釜山に向かう車中でヒョンシクは、自分がソニョンを愛することは自分個人にとつただけ「意味が深く偉大なこと」ではなく、自分の同胞に対して「大きな精神的革命」だと考えていたと思ひ返すのである。個人的な恋愛に同胞を意識していたと釈明することによって、ヒョンシクは自分の恋愛行為に「民族」のための奉仕という名

分をあたえ、恋愛に盲目的であったように見えた以前の自分の態度を釈明したのであるが、それは同時に、彼の愛が「近代的恋愛」を指向しながらもそれに至らなかつたことを示すことでもあった。「民族」をもちだすことによって、彼は個人を基盤とする「近代」から退いてしまったのである。⁽³⁶⁾それはまた、自分個人の野心に対して曖昧に「民族」による意義づけを行ってしまった作者の限界であったとも言える。「近代的恋愛」の実験は失敗したのである。

『無情』は朝鮮に存在していない男女間の情愛への憧憬をうたった『이런 말이』から、恋愛が因襲との闘いとして目的化されてしまった『開拓者』への線上にある。美しかった「イム」が不吉に変貌してゆく過程は、李光洙が自分のもとめた「近代的恋愛」から後ずさりする過程でもあった。しかし『無情』が文学作品としての深みと立体感を獲得することになったのは、まさにこの「近代的恋愛」にひそむ「近代」に対して作者がいだいた複雑な感情が、作品に露呈したためではないだろうか。

5 李光洙の選択

独立した人格をもつ女性と人間として対等に接しながら「靈肉合致」の恋愛をすることを渴望した李光洙は、すでに見たように、論理の次元とは別に感情の次元でさまざまな制約をかかえこんでいる過渡期の男性でもあった。論説では再婚を主張しながらも、『L』に露骨的に描かれているように女性の純潔には感情的にこだわり、京城学校でヒョンシクに自我礼讃の自由思想教育をおこなわせながら、その結果ひきおこされた秩序崩壊と「他者」たちとの競争状態を嫌って、むしろ大成学校が維持する規律と秩序のほうに好感を示した。⁽³⁷⁾しかるに「近代的恋愛」は必然的に自我の相剋をとまらう。先に見たヒョンシクの極端な自己卑下は、恋愛がひきおこす自己の相対化、つまり自分が相手からどう見られているかを知りたいという欲求をいだかせるところからきている。李光洙の内部にはこの相剋を厭い、自分が生まれ育った社会の伝統的秩序の中でそれなりに安定していた男女のあり方をなつかしむ気持ちが残っていた

ように思われるのである。

東洋において「近代化」という言葉が主として「西洋化」を意味したと同じ文脈で、「近代的恋愛」は西洋から伝わった西洋風の恋愛関係である。すでにわれわれは、「近代」と「西洋」に対する李光洙の屈折した思いを、本稿(中)において考察した。⁽³⁸⁾李光洙は、欲望の源泉地たる「東京白金」と、共同体の論理をもつ「五山」という二つの根拠地のあいだで引き裂かれていた。東京白金で中学生活をおくりながら自我に目覚めた彼は、自己保存と自己発展への本能的欲求が人間の活動の原動力であると認識し、欲望こそ祖国を植民地化する帝国主義の根幹であると考えて、自民族もその生存発展のために「大欲望」をもつよう主張した。だが、その反面では、欲望を正当化する自由と権利の思想によって共同体の伝統的秩序が破壊されてゆくことに嫌悪をかくさず、この外来の思想を「西洋の毒液」と呼んだ。李光洙の内部の二つの傾向は、換言すれば「近代」＝「西洋」への志向とそれへの嫌悪・反発、すなわち「近代」＝「反西洋」と呼ぶことができる。⁽³⁹⁾内部に「近代」／「反近代」あるいは「西洋」／「反西洋」という。背反しつつ同居する二つの傾向をもっていった李光洙は、女性との関係においても、近代的関係と伝統的關係のはざまで引き裂かれており、それが清らかな「イム」ソニョンの不吉な変貌と、棄てられる過去の女性ヨンチエの美しい描写ととなってあらわれたのだと考えられる。

李光洙は、『無情』を執筆しているころは夏目漱石の作品を愛読していたと回想して、その一冊に『虞美人草』をあげている。⁽⁴⁰⁾『虞美人草』と『無情』には、登場人物の性格や配置、作品構成や技法の上で相似する点が見られ、この作品が当時の李光洙にあたえたインパクトの強さを想像させるが、結論だけは正反対である。⁽⁴¹⁾自分が家庭教師として英語を教えている、美しく近代的な家つき娘に魅了された『虞美人草』の主人公は、つらく暗かった過去と訣別し、光り輝く未来をとるために、「過去の女」である恩師の娘をすてて「新女性」と結ばれようとするのだが、最後の瞬間、漱石は主人公に「道義」をとらせるのだ。『無情』にはこの小説と似通った点が多く見出されるだけに、正反対

の結末には李光洙のきわだった選択の意志が感じられる。それは自らの欲望に忠実に社会的身分上昇の野心をたらぬこうとする意志すなわち自己発展への意志であり、「近代」と「反近代」に引き裂かれながらもやはり「近代」を選択しようとする意志である。そして『無情』に立体感と陰影をあたえ作品としての価値を高からしめているのは、まさにこの選択の背後に抑えこまれて作品のさまざまな箇所からにじみ出した、李光洙の引き裂かれた内面をうかがわせる部分であるように思われる。すでに「一等国」への道を歩きはじめていた日本において、個人主義者たる漱石は「近代」への不快感をあらわすように『虞美人草』の主人公に「道義」をおしつけた。だがその日本に併合された朝鮮においては、「近代」は達成すべき目標でしかありえなかった。ヒョンシクはいかに「無情」であってもヨンチュを捨ててヨンジョンをとらねばならぬと、李光洙は信じたのだろう。「近代化」の原動力たる欲望に忠実であることが、そのまま自らの共同体の発展につながる道は、ヨンジョンを得ることで達成された社会的身分上昇によって、ヒョンシクが民族のためによりよい奉仕をする可能性(留学)を手にすることで具体化される。

もちろん個人の発展はそのまま共同体の利益につながるべきであり、両者はともに追及されるべきであろう。しかし李光洙には妻子があり、朝鮮は植民地に転落していた。ヒョンシクの野心がヨンチュを捨てることで成就したように、李光洙の欲望達成も妻の犠牲を前提としていた。また当時朝鮮がおかれていた植民地という特殊状況は個人の発展が共同体の発展へとつながる道を歪め、場合によっては両者が反目するかもしれない危険性を生んでいた。このように危うい複雑さの中で、この二つを一致させる道をがむしゃらに求めたのが李光洙であり、ヒョンシクであった。ソニョンを得て米國に留学するため釜山に向かうヒョンシクの前にヨンチュエが現れたとき、ヒョンシクは自分の「罪」を自覚して愕然とするが、その動搖を乗り越えてあくまでも幸福な一致を追い求めようとする。

五、註

(1) 二七節 全集1 五六頁

그를 볼뻔 따뜻한 아침에 핀 꽃에 비친진면, 그는 아직 바람도 모르고, 비도 모르고, 폭우도 모르고, 시골의 편지집

도 모르든, 바로 핀 꽃이다.

(2) 四、註(12) 参照

여전혀 정다운 생각이 있으면서도 동시에 미운 생각과의 심이 난다. / 선행의 가슴에는 괴로움이 생겼다.

(3) 二七節 全集1 五六頁

그러나 아직도 인생이라는 불세계를 받지 못하였다.

(11) 金東仁全集16〇頁 ただし、この言葉は車中でソニョンが嫉妬に襲われたときのことを指して言われたものである。

(4) 同上

아니, 차라리 그는 그 모든 것이 자기와 관계가 있는지 없는지를 생각하려고도 아니한다. (傍点引用者)

(12) 九六節 全集1 一六四頁
 그러므로 이제 그를 정답다고 생각한 일도 없고 하물며 사랑스럽다고 생각한 일도 없었다.

(5) 同上

말하자면 아직도 실지에 한번도 써 보지 아니하고 공간에 놓여둔 기계와 같다. 그는 아직 사람이 아니도다. (傍点引用者)

(13) 同上
 그러다가 자기가 형식과 약혼을 하게 된다는 말을 듣고 이번 놀라며 이번 실망하였다. 형식 같은 사람으로 자기의 배필을 삼으려 하는 부친이 원망스럽기도 하고 불쾌하게도 생각되었다.

(6) 同上 五七頁

이제 하물로서 큰 바람이 내리화, 이 바다의 물은 온통 온 물이, 자기 물결을 만들고 흐름을 만들지니, 그때야말로 비로소 참바다가 되리도다.

(14) 九五節 全集1 一六二頁
 형식은 몸값이 기쁘게 지낸다.

(7) 同上 五六頁

참사람

(15) 九七節 全集1 一六五頁
 내가 선행과 혼인한 것이 앙혼(仰婚)이 어닐까.

(8) 八一節 全集1 一四二頁

『나도 모르겠으니 말이다... 에고, 이제니... 이제면 좋아.』

(16) 九九節 全集1 一六八頁
 『아내가 되었으니까 지아비를 사랑합니까, 또는 사랑하니까 아내가 됩니까?』

(9) 同上

차라리 이제 생각하면 정다운 듯한 생각도 있었고, 더구나 아침에 부친의 말을 듣고는 전보다 좀더 정다운 생각도 나게 되었다.

(17) 同上
 『차라리 아아 됩니까?』
 (18) 同上
 『한마디로 대답해 주시오... 저를 사랑하십니까?』
 (19) 一一八節 同頁

(10) 九五節 全集1 一六三頁

ヨンチュ・ソニョン・三浪津(波田野)

자기의 내장이 온몸까지 퍼져 타는 듯하고 코로는 시
커민 불길이 환한 나오는 듯하다. / 세근세근하는 자기의
숨소리가 마치 자기의 곁에 어떤 커다란 마귀가 와서 서
후후 찬입김을 불어 주는 것 같다. 자기의 몸이 마치 성
경을 배울 때에 상상하던 컴컴한 지옥으로 동동 떠 들어가
는 것 같다.

- (20) 同上
그 사람들도 모두 다 무서운 마귀가 된 것 같다.

- (21) 一一七節 同頁
그런데 지금 진부라는 독균이 들어갔다. 사랑이라는 독균
이 들어갔다.

- (22) 三枝壽勝は、『無情』における類型的要素について「で
次のように述べている。「字種と善惡の間に恋愛關係や積極
的な愛情がみられぬことを考えると、この二人の將來には何
か不安が感じられる。『土』における許燕・尹貞善の關係を
その後日譚と解釈できるなら、不安は破綻を予示しているこ
とになる。』(『朝鮮學報』第百十七輯三一頁)

- (23) ソニョンの不吉な變貌の理由として考えられるもう一つ
は、野心を持つ者がその対象に対して抱くアンビヴァレント
な敵意である。過去を捨てての上がらうとする野心家の若
者を主人公とする小説において、彼が得ようとするものに対
して抱く執着と裏腹の敵意はある意味でお馴染みですらある。
スタンダールの『赤と黒』のジュリアン・ソレルが見せる上
流社会の女性マチルダへの愛と敵意、ゴリオの埋葬のあとペ

ール・ランシェーズ墓地の高みからパリの高級街をにらみつけ
て「さあ、今度は俺とお前の勝負だ」と叫ぶフロベールの
『ペール・ゴリオ』の主人公ラスティニャックのように、こ
うした若者たちにとっては自分が得たいと望むものが同時に
倒すべき強敵なのだ。金長老の家を初めて訪問したときヒョ
ンシクが大門をまえに見せた恐怖に近い圧迫感と不快感には
これから闘う敵との出会いを前にした闘士の武者震いに近い
ものがある。

- ところで「無情」においては、本来は作品の内部において
登場人物のあいだに交わされるべきこの敵意を、作者がソニ
ョンに直接行使しているかのような印象を受ける。つまりか
ち取るうとする対象物(ソニョン)への敵意が、登場人物た
るヒョンシクによって抱かれるのではなく、作者が彼女を不
吉に描くという形で表されているのだ。このことはソニョン
と対極におかれたヨンチェの場合にも該当する。ヒョンシク
が逃れようとおがいたヨンチェを作者は何故あれほど美しく
描き出したのか。愛と自尊心の闘いで消耗を強いるマチルダ
とは逆に魂の安息所であったレナール夫人の役割を、ヨンチ
ェはヒョンシクではなく作者自身に直接果たしているように
見える。ヒョンシクにヨンチェを捨てさせて身分上昇を果た
させた作者は、その代償のようにソニョンを不吉にヨンチェ
を美しく描くことによって、個人的野望の追求に対して抱い
ていた抵抗感とやましさを露呈しているかに見える。

- (24) 一一三節 全集1 一九〇頁

그러나 만사가 이미 다 지나갔으니 이제 와서 한탄하면 무
엇하고 분할이불 하면 무엇 하랴. 차라리 웃는 낯으로 형
식을 대하여 저편의 마음이나 기쁘게 하여 줌이 좋으리라
하는 생각도 난다.

- (25) 「近代的恋愛」については、張競氏の以下の著作がたい
へん参考になった。

①「五四運動前後の中国における西洋文化の受容と日本—与
謝野晶子の「貞操論」をめぐる—」(東大比較文學會「比
較文學研究」第六十號一九九一)

②「恋の中国文明史」(筑摩書房 一九九三)終章 恋愛の
發見—中国文化の近代

なお最近刊行された同氏の著作「近代中国と『恋愛』の發
見」(一九九五年六月 岩波書店)には①論文が収録されて
いる。朝鮮近代文學を恋愛という視点から読み解く上でも參
考となる著作である。

- (26) 「어린 벗에게」は一九一七年『青春』九、一〇、一一号
(それぞれ七月、九月、十一月発行)に掲載されており、發
表順でいえば「無情」より遅い。しかしこの作品を収めた
作品集「젊은 꿈」(一九二六)の自序によれば、実際に書か
れたのは一九一四年に中国とシベリアの放浪を終えて五山に
もどり教鞭をとっていたときである。(全集10 五四五頁)

- (27) 「開拓者」は一九一七年十一月から一九一八年三月まで
毎日申報に掲載された。

- (28) 「젊은 꿈 自序」(全集10 五四五頁)

ヨンチェ・ソニョン・三浪津(波田野)

지금 와서 보면 혼자 웃을 곳도 있고 유치한 곳도 있지만
다 손을 대지 아니하고 그대로 두었다. 내게는 그것이 내
생명의 한 조각 — 젊은 꿈의 한 조각으로 차마 건드릴
담이 없었기 때문이다. 그러나 생각하면 그때에 나는 불
같은 열정이 있었고 풀없는 회망이 있었고(後略)

- (29) 註(26)で述べたように、「어린 벗에게」は李光洙自身、
大陸放浪を終えて五山にもどってから東京に再留学するまで
の間に書いたと述べている作品である。三枝壽勝は前掲論文
において、「어린 벗에게」と「開拓者」は李光洙と許英齋と
の恋愛に直接関係する作品であろうという推定のもとで、「어
린 벗에게」の全編が書かれたのは「無情」連載当時とみな
すのが妥当だろうと述べた。(二二頁)筆者としてはこの作
品が書かれたのは李光洙の記憶通り大陸放浪と東京留学の間
だと考えている。妻のいる男性主人公が恋する女性が必ずし
も許英齋を投影している必然性はない。李光洙は他にも様々
な女性と出会ったのではないだろうか。

- (30) 親の決めた婚約者と結婚した魯迅は一九一八年の「隨感
録四十」で次のように述べている。「だが女性の方には、も
ともと罪はない、現在のところ古い習慣の犠牲になっている
のだ。われわれは(中略)ただこのまま一代を犠牲にするこ
とによって、四千年の古い帳簿に締めくくりをつけるばかり
だ。(中略)古い帳簿はどうしたら、抹消されるか? 私は
いう、『われわれの子供を完全に解放したら!』と」(一九
八六年岩波書店「魯迅選集第六卷」三三、三四頁)筆者は以

前の論文で李光洙の児童意識と魯迅の父親意識を比較したが、(本稿六、註(27)参照)この比較は恋愛に関しても成り立つようである。

(31) 全集1 五七一頁

金鏡은 제行為에 무엇이든지高尚한意義를 붙이고야 마는 바물이 있다.

三枝壽勝は前掲論文でこの部分を引用し、「作者には早くから己れの行為に理由をつけて合理化する欲望が存在していたのであろう」と述べている。(五四頁)

(32) 三枝壽勝前掲論文二八頁

(33) 九七節 全集1 一六五頁

사랑의 앞에서는 모든 고난과 자부심이 다 없어지고 만다.

(34) 同上

조선 문명의 지대들은 내 손으로도 놓는다 하던 형식의 자부심은 다 없어지고 말았다. 없어진 것은 아니지만 그것이 형식에게는 그렇게 중요한 것은 아니었다.

(35) 一一五節 全集1 一九二頁

그러므로 자기가 선행한 사랑하는 것은 자기에게 대하여서는 누구의 뜻의 권고 기록한 일이며, 자기의 동포에게 대하여서는 권, 정, 신, 자, 혁, 명으로 생각한다。(傍点引用者)

(36) 朝鮮近代文学において恋愛がもつ比重は西洋や日本に比べて軽いように感じられる。植民地化という民族的受難の前で、個人的な営為である恋愛は退かざるをえなかったであろう。ソニョンに執着するヒョンシクの心の動きは恋愛と

ではきわめて正常なものであり、描き方によっては別の印象を与えるものになったはずである。だが李光洙は最終的にそうした個人的な恋愛感情を民族のための奉仕に止揚しようとし、ヒョンシクの恋愛はどちらかといえば否定的に扱われることになった。李光洙がとった姿勢は、その後も本格的な恋愛小説が書かれなかった朝鮮近代文学の一つの出発点ではなかったのだろうか。

現代韓国の研究者たちもヒョンシクの恋愛態度に関してほぼ概して否定的である。たとえば金允植氏は「李光洙의 時代」において、「無情」の構造層の一つである「師弟關係」がヒョンシクの恋愛態度によって破壊されたのち三浪津で回復されたと述べているし(五三七頁)、徐榮彩氏は、ソニョンに恋々とするヒョンシクは「矮小な姿に転落」したのであり、ソニョンとの和解によって『無情』の精神的中心の地位を回復するのだとしている。(一九九二年ソウル大学碩士論文「無情研究」四八頁)しかし西洋文学の根幹をなすといっても過言でない恋愛を李光洙がどのように受容し「無情」にそれがどのように表れているかに関しては、もう少し精密な検討があってもいいように思われる。

(37) 本稿(中) 九六頁参照

(38) 本稿(中) 六、李光洙の内部の二つの傾向(『金鏡』と『李光洙의 時代』)参照

(39) 李光洙の「近代」Ⅱ「西洋」嫌悪は、植民地時代末期に日本の戦争の論理と結びつく危険性を持っているように思わ

れる。

(40) 「多難한 半生の 途程」(一九三六) 全集8 四五二頁

(41) 崔明姬「漱石『眞美人草』と春園『無情』の比較研究」

六、三浪津(1)

1 「中幕」と「大団円」

金允植氏は、ヒョンシクとソニョンという二人の主人公を合わせれば作家自身になると指摘して、次のように述べている。

「春園が一挙にこのような大長編を書くことができたのは、ひとえに自伝的事実をほとんど飾りたてることなくありのままに羅列するという考えの下に執筆したから可能だったのである。したがって『無情』は書いたのではなく書かれたのであり、書かれたのではなく、『語られた』のであり、語られたのではなく、『流れ出した』のだ。」⁽¹⁾

本稿も同様に、ヒョンシクとソニョンがともに作者を投影する主人公であるという立場をとっているが、流れ出した部分に関しては、「冬休みに一気に書かれた約七〇回分」すなわち、ヒョンシクが京城学校を出るところまでであり、本稿(中)で考察したところによれば、作者にとつての過去を意味する部分のみであると考え⁽²⁾。自身の幼い日の不幸と五山学校での屈辱的な失敗を、ソニョンとヒョンシクを通して一気に語ってきた作者は、このあと現在にたちどまって未来の構築を試みることにになり、それとともに小説の流れは今までの流れ出すような勢いを失うからである。

さまざまな事件が連続した五日間が終わってからソニョンとヒョンシクが同じ列車に乗り合わせるまでの一ヶ月間、ソニョンは黄州で豊かな自然と音楽にかこまれて感性を開花させてゆき、ヒョンシクはソウルでソニョンの愛を確かめる。

ソニョン・三浪津(波田野)

一九八六 お茶の水女子大学大学院人間文化研究科「人間文化研究年報」第十号

められずに苦しんでいる。黄州での生活はおおらかではあるがまのびした感をまぬがれず、ソウルで「近代的恋愛」を実践するヒョンシクには作者によって無理に行動させられるごちなさが感じられるなど、小説の流れはそれまでと違って滞った印象をあたえる。金東仁はこの時期を、新聞連載の途中で展開方針がたたないときに行う時間稼ぎの「踏歩」だとみなしたほどだ。事件が連続した五日間のあとで、この一ヶ月は確かに弛緩した中だるみのように見える。しかし、それは金東仁の指摘するような時間稼ぎではなく、ふたたび緊迫する最後の二日間の準備の期間であったと考えることができる。

本稿(中)において筆者は、李光洙が自分の五山学校時代を失敗だとみなしていた根拠として、『無情』執筆中の二月末に誕生日を迎えて書いた随筆中の「序幕は失敗だった」という言葉を引用したが、それにはこれから「中幕と大団円」があるという立て直しを示唆する文が続いていた。冬体みの終わりに『無情』約七十回分をまとめて毎日申報社に送った李光洙は、ソニョンとの婚約の場面と、それにつづくヨンチュエとヒョンウクの車中の出会い(九〇節)までを順調に書きすすんだあと、二月の末あたりにこの「踏歩」の段階を迎え、このあとの「中幕と大団円」のために「楽屋で心をこめて扮装をしてい」た、すなわち『無情』をしめくくる構想を練っていたのではないだろうか。

「中幕」は、八月の初めのある日に始まる。黄州でヨンチュエとヒョンウクが乗った釜山行きの列車に、南大門駅でヒョンシクとソニョンとウソンが乗りこんで来て、彼らの間にさまざまな葛藤がひきおこされるが、その翌日、三浪津の大洪水を背景とした「大団円」でその葛藤は解決されるのである。本章および次章では、この二日間の「中幕」と「大団円」で起きた葛藤とその解消の経過を考察して作者の練った構想と舞台立ての痕跡をさぐり、それがいかなる方向をめざしてなされているかを考える。そうすることで、前章で述べた個人と民族共同体の利益追及を作者がどのようにして一致させようと意図したかを浮き上がらせることができるのではないかと期待するからである。

本章においては、「中幕」たる車中でおこる三人の登場人物の動揺と心理変化をそれぞれ考察する。黄州―南大門―三浪津の線にそって動きを持續する汽車の中で、三人が示す動揺は、翌日の「大団円」で彼らの心が融和するための準備段階とすることができる。三浪津に向かいながら、ヨンチュエとソニョンはそれまでの生き方を根底からゆるがすような動揺をむかえる。一方ヒョンシクにも「大変動」が起こるが、彼はあらたな秩序の創出によってそれをのりこえ、翌日の「大団円」の主人公たる準備を整えるのである。

2 ヨンチュエの動揺

車中におけるヨンチュエの心理変化は本稿の「二、ヨンチュエ(2)」ですでに考察したが、ここでもう一度見ておくことにする。沙里院でヒョンウクと別れたヨンチュエはソウルに着くまで冷静であったが、「南大門という声に心がへんに乱れ」はじめ、発車まぎわに聞こえた「イ・ヒョンシク君、万歳！」という声で完全に冷静を失って、「わけのわからぬ涙」を流す。ヒョンシクが同じ汽車に乗り合わせていることを知って、「胸の奥深く」潜んでいたヒョンシクへの思いが一度に噴き出したのだ。一ヶ月前にヒョンシクの下宿を訪ねたとき、彼の態度から拒絶を感じ取って絶望したことは、その直後におこった清涼里事件が自殺の理由としてとってかわったため、曖昧に忘却されていた。ヨンチュエは今度こそヒョンシクの意中を確かめようと決意するが、彼の婚約を知らされて断念せざるをえなかった。自分は死にもぐるいで守節し、それが破られたときには自殺しようと思えたのに、ヒョンシクはそんな自分のために一年の喪にも服さず婚約者と米国にむかう途中であると知ったヨンチュエは、深刻な虚脱感にとらわれた。

「自分は世間に騙されてつまらない人生を送ってきたように思われ、今まで全力をつくしてきたことが何の意味もないような気がして、失望と悲しみが一度にほとばしり出る。」

すでに考察したように、虚無感から来るこの悲しみは、ヨンチュエが長いあいだ守ってきた世界が内部から崩壊するときの心の痛みであった。幼年の記憶と固くむすびついて彼女の生存を支えてきたこの世界は、旧価値体系によって

律せられた因襲の世界であり、一ヶ月前、汽車の中でピョウクがヨンチュエを説得しながら明快に否定したものであった。生き続けることを本能的に欲していたヨンチュエは、いったんは彼女のこの説得を受け入れたが、心の痛みをともなわない自己の世界の否定は、論理の次元の否定にすぎなかった。「イ・ヒョンスク君、万歳」という一声で目覚めたのは、ヒョンスクへの思いとともに、それに付随するこの過去の世界である。黄州で彼女の「胸の奥深く」にひそんで眠っていたこの世界は、ヒョンスクが近くにいう状況でふたたび目覚めて彼女を支配したのだ。ところが肝心のヒョンスクは、この世界をあざわらうかのように、すでに婚約者と留学するところであった。ヒョンスクから「塵芥のように」無視され拒絶されたのはヨンチュエ自身であるとともに、彼女が守り続けてきたこの世界の論理でもあると言える。ヨンチュエは心の痛みをもって、それまでの自分の生き方に虚しさを感じる。こうして一ヶ月前にピョウクの説得を受け入れたときよりもずっと深い部分で、ヨンチュエの美しく凍りついていた世界は少しずつ崩壊をはじめたのである。三浪津に向かうヨンチュエは、そんな動揺の中にあつた。

3 ソニョンの場合

一方でソニョンもまた、それまで生きてきた世界との訣別を迫られていた。父母にみまもられながら大邸宅の深窓で育ったソニョンは、人を憎まねばならないような目にあつたことすらなかつた。外界との「関係」をもたず、自分というものをもたない彼女を、作者は納屋に置きっぱなしの「機械」と表現し、やがて彼女の心に「暴風雨」が到来することを予告していた。汽車が走りはじめたとき、突然もう後戻りができないことを予感したソニョンは涙を流す。この先ながあろうと、ソニョンはヒョンスクについてゆく運命におかれたのだ。

発車してまもなくヨンチュエが同じ汽車に乗り合わせていることを知つたヒョンスクは、やむなくソニョンにヨンチュエとのいきさつを打ち明けた。不当にも、ヨンチュエという義理ある女性の存在をかくし、あまつさえ、その人が自殺をした直後に臆面もなく自分と婚約していたヒョンスクの行為を知つてソニョンは衝撃をうける。だが、前の晩には父母に祝福の祈禱をうけ、さつきは南大門駅で知人たちの盛大な見送りをうけてきたソニョンにとって、ヒョンスクはすでに運命共同体であつた。ソニョンははじめて嫉妬という「火の洗礼」をうける。

それまでの安定した生活から出てきたばかりのソニョンを、作者は「ソニョンの人生の学課は、これから漸く中等科に入ろうとしている」と表現し、⁽¹⁰⁾ 毒菌にたいする抵抗力を養わなかつた人間が、細菌の充満している外気にでたとたん多くの病氣におそわれるように、ソニョンもこれからいろいろな目にあい、さまざまな感情を経験するだろうと述べている。三浪津に向かうソニョンは、ソウルを出てからの短い時間のあいだにすでに精神の暴風雨に遭い、後戻りのできない状況におかれながら、これからの人生に対処してゆくことを迫られていた。

4 ヒョンスクの「大変動」と新しい秩序

最後にヒョンスクの場合を見る。車中でヨンチュエの生存を知つたとき、ヒョンスクは「忘れようとしていた自分の罪」⁽¹¹⁾ を突きつけられたような苦痛を覚えて動揺した。しかしそれは一ヶ月前に下宿の老婆の言葉に触発されて自覚したあの「無情」に対する罪悪感と同じものではない。愛と救いを求めて自分を訪ねてきたヨンチュエの心に気づかぬふりをし、清涼里事件のあと自殺のおそれのある彼女を妓生房に置き去りにし、ピョンヤンではその死に安堵を感じたという数々の「無情」に対してあの日自覚した罪の意識は、その直後ウソンが来訪すると同時に意識の底に沈んでしまい、ウソンから金を借りてピョンヤンに行くと言ひ張るヒョンスクを支配していたのは、ただ世間的な義理を果たしておかねばならないという強迫観念であつた。

この日、車中でヨンチュエの生存を知つたヒョンスクが「罪」と感じたのも、ピョンヤンで彼女の死体を捜し出して弔わなかつたことや、一年の喪にも服さずに婚約してしまつたことなど、要するに旧価値体系の要求する慣習にそむ

いたという点であつて、人間として自分がどれほどヨンチュエに「無情」であつたかということではない。どうとうンニョンにヨンチュエとのいきさつを打ち明けねばならなくなったヒョンシクが「罪」と感じて言いよどむ部分は、ヨンチュエが自分のために守節していたということもさることながら、なによりも婚約がヨンチュエの自殺の翌日に行われたという事実であつた。ソニョンがもつとも衝撃を受けたのも、この時間の問題である。この事実こそ、旧価値体系を正面から否定できずにいるヒョンシクにとつて、もつとも隠しておきたかつた点であつた。おそらく彼は金長老に「ヨンチュエとの関係を話した」⁽¹²⁾さいにも、この時間の問題については曖昧にしておいたと想像される。ヨンチュエはヒョンシクの婚約を知らされたとき、「それじゃ、あの時も婚約していたのかしら」と考えているが、もしヒョンシクが婚約したのが自分が死んだはずの翌日だつたと知つたら、彼女の衝撃はどれほど激しかつたことであらう。ヨンチュエと再会し自己弁明の機会をえたとき、ヒョンシクはこの部分を曖昧にごまかして切り抜けてしまふ。

要するにヒョンシクが「罪」と感じているのは、自分の欲望に忠実であつたことそれ自体ではない。欲望に忠実であるがために犯した慣習からの逸脱、いかえれば他人に堂々と釈明できるかたちで処理しえなかつた失敗への後悔である。彼の欲望追及の意欲はみごとなまでに健在であつて、ヨンチュエの死に安堵した自分の「無情」を反省するどころか、「ヨンチュエは絶対に死んでいるべきだ。生きているとしても自分は知らずにいるべきだ」とヨンチュエに対して逆恨みまでしている。そして本稿(上)で見たように、自分はヨンチュエを捨てるつもりはなかつたと自己弁護してから、二人の女性との出合いを回想して、自分の心が最初から「富と教育」をもつソニョンを選んでいたことを確認し、ヨンチュエに心が動いたのは、ソニョンが「月中の桂」であつたために、自分でも折ることのできる「杏花の枝」ヨンチュエを取らうとしたにすぎなかつたのだと分析する⁽¹³⁾。ヒョンシクは旧価値体系に従わなかつたことの「罪」は意識しつつも、ソニョンを得たことは自分の欲望と「愛」に忠実であつたにすぎないと正当化しているのだ。

だが作者はこのあと唐突に直接介入して、「ソニョンを自分の生命のごとく愛していると思ひながらもソニョンの性格ひとつ知らない」ヒョンシクの愛は、「外貌の愛」であり「いまだ進化を経ない原始的愛」⁽¹⁴⁾でしかなく、このようなヒョンシクの恋愛は現在(一九一七年)の朝鮮青年のあいだによく見られる。「過渡期」の愛にすぎないと批判し、「自分の愛がこのような愛であると悟つたなら、ヒョンシクの前途には大變動がおこらないではすまないだらう」⁽¹⁵⁾(傍点引用者)と、これからヒョンシクに起きる「大變動」を予告する。そしてそれはただちにやってくる。すなわちヨンチュエに再会して心を動かされたヒョンシクは、ソニョンに対する自分の「愛」に自信を失ひ、それが「外貌の愛」にすぎなかつたことに気づいて動揺するのである。

ヨンチュエの同乗を知つたヒョンシクは彼女に会いに行き、すかさず自分がビョンヤンまで彼女を追つていつた事実を知らせて、弁明の機会をえたことを喜んだ。そして「死体をお捜しになるのに、たいそうご苦労なかつたことでしょうね」⁽¹⁶⁾というビョンウクの慰勞の言葉に感じた内心のやましさを糊塗するかのようになり、逆にヨンチュエが葉書もよこさなかつたことを非難し、もし彼女から葉書を受け取つたなら自分は必ずや彼女を迎えたであらうと憤慨する。その様子を見て不安になつたヨンチュエはヨンチュエで、黄州でのビョングクへの思慕など忘れたかのように、ヒョンシクに迷惑をかけぬよう「無理に我慢して黙っていました」⁽¹⁷⁾とあくまでも自己犠牲的な女性としてふるまふ。偽善にみちあふれたこの会話の帰結として、ヒョンシクはウソンにソニョンとの婚約解消を口走ることになるが、それはヨンチュエの模範的ともいえる姿に接した以上とらえないわけにいかない言動にすぎず、ウソンに一笑に付されることを当てにした体面上の行為でしかない。なぜならヒョンシクの深層の意識において、ソニョンの優位は不動であり、ヒョンシクが迷つたり悩んだりしているのは、すべて表面の意識においてのことだからだ。

自分の座席にもどり、今度はソニョンを見ながら彼女こそ「僕が愛する妻」⁽¹⁸⁾だという思いにとらわれたヒョンシクは、「長い考えの後にヒョンシクはこのような結論に達した」

自分がソニョンを愛するのも結局は根の深い愛ではない。自分はソニョンの顔が美しいことと、態度が上品なことと、学校で優等であることと、金持ちで両班の家の娘であることのほかに何もソニョンに關して知ることがない。僕はまだ——婚約した今でも、ソニョンの性格をわからないでいる。

もちろんソニョンも自分の性格をわからないでいる。互いに理解することなく真の愛が成立しうるだろうか。⁽²⁾一説してわかる通り、この結論は「自分は誰を愛しているのか」という問いに対する答えになっていない。ヒョンシクの頭にあるのはソニョンだけである。二人の女性のあいだで迷う表面的な悩みにもかわらず、ソニョン選択の決定は微動もしていないのである。だが作者は、この結論をきっかけとして、予告していた「大変動」をヒョンシクにもたらしことになる。三浪津に着く直前のヒョンシクに起こった「大変動」の内容を見てみよう。

「愛というものは人類のすべての精神の中でもっとも重要で偉大なものの一つと信ずる」ヒョンシクは、かねてより愛を真面目に考えようとし、ない同胞の態度に不満をいだき、「ソニョンを愛するのは、自分にとってきわめて意味が深く偉大なことであるし、自分の同胞にとっては大きな精神的革命であると考え」て、ソニョンに対する自分の恋愛が民族の根本となる偉大な事業であるという自覚のもとに、宗教的までの熱意をもって彼女を愛してきた。⁽³⁾先に述べたように、ここで「民族」を前面におしだすことよって、ヒョンシクのソニョンへの愛は個人を基盤とする「近代的恋愛」から一歩しりぞくことになる。⁽⁴⁾ところが、ヨンチュを前にして彼女に心が動いたことで、ヒョンシクはソニョンに対する愛が思っていたほど根の深い愛ではなかったことを自覚して失望する。

「しかしいま考えてみると、自分のソニョンに対する愛はあまりに幼稚なものだった。あまりに根拠が薄弱で内容が貧弱なものだった。

ヒョンシクは今晚このことを悟った。悟って悲しかった。まるで自分が人生の経歴をすべてそそぎこんでやってきた事業が、一朝にして虚しいものであることを悟ったような失望を⁽⁵⁾あじわった。」

ヨンチュが車中でヒョンシクの婚約の事実を知って、「自分の今まで全力をつくしてきたことが何の意味もないような」虚無感に陥り、それまでの世界観を崩壊させようとしていたとき、ヒョンシクもまた、自分のそれまでの「事業」に対する虚しさに陥っていたのである。ここでヒョンシクには、ソニョンへの愛を「民族」から個人へととりもどす可能性もあった。だが彼はその逆の道をえらぶ。すなわちこの虚しさを逆転させて、民族の未来発展のための秩序を作り出し、自分とソニョンをそれによりますます深く組みこませたのだ。⁽⁶⁾

自分の愛が「幼稚」な愛であったという自覚は、「自分の精神の発達の程度がまだきわめて幼稚であること」への認識を生み、そんな自分が今まで学生たちに文明と人生を教えてきたことは僭越だったというそれまでの先覚者意識への反省につながったとき、彼の中には「僕はまだ子供だ」という「子供意識」が浮上する。⁽⁷⁾

「僕は朝鮮の進むべき道がはっきりとわかっていると思っていた。(中略)しかし、これも畢竟は子供の考えにすぎないのだ。」⁽⁸⁾

朝鮮の進むべき道を模索するために必要な知識の不足、人生経験の不足、確固とした価値観の不在、すべての面での「無識」を痛感して自分を「子供」だと意識したヒョンシクの視野に、もう一度ソニョンが入ってくる。いままで自分はソニョンの幼さをものたりなく感じ、子供だと思っていたが、こうしてみると自分も子供だ。

「祖先伝来の思想の系統は皆うしない、混沌とした外国の思想のなかで、いまだ自分たちに適当と思われるものを選ぶことができず、どうしたらいいのかわからずに彷徨する兄と妹(中略)これが自分とソニョンの姿のように思われた。」⁽⁹⁾

眠っているように見えるソニョンの手に、ヒョンシクは思わずキスをする。だがそのキスは、先日金長老の家でソニョンの愛を確かめるために手を握ったときとは違って、ソニョンを「妻」というより、ともに手をひいて道をさがす父母をうしなった妹⁽¹⁰⁾とみなすキスだった。

われわれはここで二人の關係が変質したことを感じる。個人同士の自我葛藤をはらむ「近代的恋愛」が大人の愛であるとするなら、二人とも子供であるときにそれは成立しないからだ。こうして混沌の中で彷徨する兄と妹という等価な存在として投げ出されたヒョンシクとソニョンに、つぎに文明への方向性をもった秩序があたえられる。

「そうなのだ。だからわれわれは学びにゆくのだ。君も僕もみんな幼ない子供だから、遠く遠く文明の国へと学びにゆくのだ。」⁽³¹⁾

文明を頂点とするこの秩序は、同じように彷徨する子供であるとヨンチュエ、ピョンウク、イ・ヒギョン一派や京城学校学生、そのほか京城の街角で見た無数の学生たちを再編成する。そして文明をめざしたこの秩序にすべての若者が組みこまれたとき、「ヒョンシクは心の中で大きく腕をひろげて、その幼い弟妹たちを腕いっぱいにだきしめ」、⁽³²⁾ 彼らが文明を学んで帰ってきたときの新しい朝鮮を想像しながら微笑を浮かべて眠りにおちてゆく。

「混沌」の中で「彷徨」する「幼い子供」としていったんは平等な形で投げ出されたヒョンシクとソニョンは、こうして文明を学ぶことを至上命令とする秩序によって序列化された。この秩序は他の若者たちも同時に序列化し、ヒョンシクは、現在留学しようとしているという条件によってヒギョン一派の上位者となり、知識量によってソニョンを導く立場にたつ。新しい秩序は京城学校で起きた旧秩序の崩壊による混乱と自我たちの競争状態を収拾し、「近代的恋愛」に付随する自我葛藤を解消し、同時に民族の文明化のために働くという大義名分によってヒョンシクの身分上昇を正当化したのである。

以上がヒョンシクの内部に作者が起こした「大変動」の顛末である。自分の愛が「幼稚」であったことの認識をきっかけとして、自身の「精神発達程度」そのものの「幼稚」さに気づいたヒョンシクは、先覚者意識をもっておこなってきた今までの行為すべてが幼稚であったと失望して、いったん自分は幼稚な子供にすぎないという虚脱状態におちいるが、そのとき逆転がおこる。すなわち、幼稚だからこそ、子供だからこそ、「だからわれわれは学びにゆくのだ」という積極性への転回である。

こうした逆転の論理は、李光洙にとって初めてのものではない。筆者は以前の論文で、李光洙が上海から帰国して書いた論説の中に見られる逆転の論理、すなわち植民地に転落し「もっとも惨めでもっとも窮している朝鮮民族は、もっとも聖らかでもっとも貴い天職をもとうとしているのではないか」として、自民族の苦境こそが「人類を救済」する「愛の国」の条件の具備であるとした論理を、幼いころ愛を求めながらもえられない孤児であった彼が、自分を愛してくれない他人を愛することで逆説的な心の安定をえた発想の延長ではないかと指摘したことがある。⁽³³⁾ 同様の発想は、中学時代の論説文『今日我韓青年의 境遇』や『朝契 사람인 青年들에게』にも見られる。そこで李光洙は、自分たち若者を教え導く先達の存在しない朝鮮の現状を悲観したあと、そんな時代に生まれあわせてすべてを自分たちで創造建設せねばならないからこそ自分たちは「高貴」なのだ、悲観主義から楽観主義への転換をはかり団体で自己修養する必要をといっている。これは楽観主義などというよりも、こうした論理によって自らを奮い立たすしかなかったのが見出した悲壮なまでの逆転の発想というべきであろう。この論理を李光洙は『無情』においてもヒョンシクに使わせたのだ。

「子供意識」は、帝国主義の世界で劣敗していた朝鮮がこの先勝ち抜いていくために必要だと李光洙がみなしたものであった。現在の弱者が「力の論理」に参加して強者へとのしあがるには、自分たちの無力なすがたを徹底的に客観視することが必要とされる。妓生という「外的現象」にもかかわらず守節する烈女という「内的自我」と同じこもり、美しく凍りついた世界から出ようとしなかったヨンチュエを、清涼里事件によって現実を引きずりだした李光洙は、ここで読者に対して朝鮮民族全体を哀れな孤児というすがたに象徴させることで自分たちの立場を無意識裡にでも感じ取らせようとしているかに見える。自分たちが無力であることを認めることから生まれる危機意識、それこそが力を養成せよという準備思想の原動力なのだ。⁽³⁴⁾

こうして李光洙がヒョンシクの内部におこした「大變動」の結果として、文明をめざして民族が發展し、個人の發展はそのまま民族の發展に直結し、そのなかでは個人の葛藤が解消されるといふ、ひとつの秩序が作り出された。だが、この秩序にすべての若者を組みこんで「大きく腕をひろげて、その幼い弟妹たちを腕いっぱいにだきしめ」ながら、笑いを浮かべて眠りにおちた彼の向かいで眠ったふりをしていたソニョンは嫉妬に身をこがし、すぐ後ろの車両には「恨」をとかぬヒョンチェがいる。彼らを和解させることは、論理では不可能である。作者は翌日の三浪津で、これらの心を感情の次元で融和させ、かれらが進んでこの秩序に参加すべく「大団円」を準備する。

六、註

- (1) 金允植 『李光洙와 그의 時代』 五六二頁
- (2) 波田野 『無情』の研究(中)「一〇二頁參照
- (3) 金東仁全集 18 五七頁
- (4) 波田野 『無情』の研究(中)「七二頁
- (5) 一〇四節 全集 1 一七六頁
- 『어제 담배문이라는 소리에 마음이 이상하게 혼란하여 지금이다 그려. 어서 차가 떠났으면 좋겠다。』
- (6) 同上 一七七頁
- 지금까지 아무것도 형식을 잊어버리려 하였으나 발금 같은 기차에 형식이 단 것을 생각하매 알 수 없는 눈물이 자 연히 떨어진다。(傍点引用者)
- (7) 本稿二、註(10)
- (8) 本稿二、註(21)
- (9) 同上
- (10) 一一七節 全集 1 一九五頁

- 선형의 인생의 학파는 이제부터 차차 중등과에 들리 한다。
- (11) 一〇五節 全集 1 一七八頁
- 어제가 세상에 없으매 잊어버리려 하던, 가, 가, 괴악은 영체가 살아 있던 말들 들으매 칼날같이 날카롭게 형식의 가슴을 찌른다。(傍点引用者)
- (12) 一〇八節 全集 1 一八一頁
- 한번 차가와 영체의 관계물이 야기한 끝에 김장로가 웃으며, 『담배가 한두번 그리기도 애사지。』 하였다。
- (13) 一〇六節 全集 1 一八〇頁
- 『그러면 그때에 벌써 약혼을 하였던가。』
- 一一一節では「이·히ョン시크가すごく無情な人に思えるの。それでも私が死に行ったらんら少しは探してみるものなの。…いつのまにか婚姻をして…」(原文朝鮮語 全集 1 一八七頁)と自分が失踪したあとと婚約したのではないかと疑っている。
- (14) 一〇七節 全集 1 一八〇頁

영체는 꼭 죽었어야 할 것이다. 살아 있다라도 자기가 묻
았어야 할 것이다.

- (15) 同上 一八一頁 本稿(上)四四~四五頁參照
- (16) 同上

대개 형식의 사랑은 아직도 의도의 사랑이었다. 형식은 신
형을 자기의 생명과 같이 사랑하노라 하면서도 신형의 생
적은 한 발도 몰랐다。(中略) 그의 사랑은 아직 진화물
지나지 못한 원시적 사랑이었다。

- (17) 同上
- 자기의 사랑이 이러한 사랑인 줄을 깨닫는다 하면 형식의
진도에는 대반동이 일어나지 아니치 못할 것이다。(傍点引
用者)
- (18) 一一三節 全集 1 一九〇頁

『前略』 그러면 시체를 찾으시노라고 피 애물 쓰셨겠네。『
本稿二、註(7)參照

- (19) 同上
- 『前略』 그래서 의지로 참고 가만히 있었읍니다。』
- (20) 一一四節 全集 1 一九一頁
- 그러다가 또 앞에 앉은 신형을 보며 「이아 말도 내 아내,
내 사랑하는 아내」라는 생각도 나다。
- (21) 同上

대체 자기는 누구를 사랑하는가. 선형인가, 영제인가.

- (22) 同上 一九二頁

오래 생각한 후에 형식은 이러한 결론의 달하였다… 자기

ヒョンチェ・ソニョン・三浪津(波田野)

가 선형을 사랑하는 것도 결코 부러웠음은 사랑이 아니다.
자기는 선형의 얼굴이 어여쁜 것과 태도가 압전한 것과 학
교에서 우등한 것과 부자요 양반의 집 딸인 것밖에 아무
것도 선형에 관하여 아는 것이 없다. 나는 아직도——약혼
한 지금까지 선형의 성격을 알지 못한다。／＼ 물론 선형도
자기의 성격을 알지 못한다. 서로 이해함이 없이 참사랑의
성립될 수 있을까。

- (23) 一一五節 全集 1 一九二頁
- 그는 사랑이라는 것을 인물(初版では 인물) になつて
るので、その誤植と思われ(모든 정신 작용 중에 가장 중
요 기록한 것의 하나인 줄은(初版では 줄) 믿는다。／＼ 그러
므로 자기가 선형을 사랑하는 것은 자기에게 대하여서는
귀히 뜻이 깊고 기록한 일이지요, 자기의 동포에게 대하여서
는 큰 정신적 혁명으로 생각한다. 그러므로 형식의 사랑의
대한 태도는 종교적으로 진실하고 진정한 것이었다。
- (24) 同上

그러나 이제 생각하여 보건대 자기의 선형에게 대한 사랑
은 너무 유치한 것이었다. 너무 근거가 박약하고 내용의
빈약한 것이었다。／＼ 형식은 오늘 저녁에 이것을 깨달았다.
깨달으매 슬웠다. 마치 자기가 인생 정력을 다 들이서 하
여 오던 사업이 일조에 헛된 것인 줄을 깨달은 듯한 실망
을 맛보았다。

- (25) 同上

그와 함께 자기의 정신의 발달한 정도가 아직도 극히 유치

함을 깨달았다.

(26) 同上

자기는 아직도 어린아이이다.

라비와 누이 (中略) 이것이 자기와 신형의 모양인 듯하였

(30) 同上

자기의 아내라고 하는 것보다 같이 손을 잡고 길을 찾아가는 부모 잃은 누이

(31) 同上

올다 그러므로 우리들은 배우러 간다. 비나 내나 다 어린 애이므로 멀리멀리 문명향 나라로 배우러 간다.

(32) 同上

형식은 마음속으로도 커다란 관을 빌려 그 어린 동생들을 한 판에 안아 본다.

(33) 波田野「李光洙의 민족主義思想と進化論」(「朝鮮學報」第百三十六輯)一一八頁

(34) 註(27)論文參照

(28) 一一五節 全案 1 一九二頁
나는 조선의 나갈 길을 분명히 알았거나 하였다. (中略)
그러나 이것도 필경은 어린애의 생각에 지나지 못하는 것이다.

(29) 同上 一九三頁

조상적부터 전하여 오는 사상의 계통은 다 잃어버리고 온 문란의 극 사상 속에서 아직 자기네에게 처당하다고 생각 하는 바를 딱 할 줄 몰라서 어쩔 줄을 모르고 방황하는 오

七、三浪津(2)

1 三浪津의 非現實感

三浪津にはどこか現実感が欠如している。すさまじい自然の脅威を背景にくりひろげられる若者たちの善意の行動、それに感動する周囲の人々、ばらばらだった若者たちの心は熱氣をはらんだ行動のなかで一つになり、ついに彼らはヒョンシクのリードで民族の使命にめざめてゆく。前日の夜作り上げた秩序に彼らを取りこむことに成功して上位者となったヒョンシクは、青い二等車切符をふりかざしながら、朝鮮が学んでこい、力を得てこいと自分たちに学費を

くれたのだと、民族的使命感を煽動しつつ同時にみずからの身分上昇を正当化する。個人的欲望の追及はこうして民族発展の追及と重なり合わされたのだ。

だが感動的な場面の連続と民族愛の昂揚にもかかわらず、読み終わったあとでふと感ずるかすかな不安と虚脱感は、いったいどこからくるのだろうか。あの辛辣な金東仁が「ここで三浪津水害に遭った人々に対する民族愛によって四人の感情を融和させた点は見事である」とめずらしく賞賛しながらも、すかさずこの瞬間的な感動がいつまで続くかという疑問をさしはさみ、「われわれはヒョンシクのような定見のない人物においてこの感動がただの一日もつかどうかを疑う」と揶揄したように、人の心のうつろいやすきに由来する非現実感なのだろうか。いや、そもそも作者自身が金東仁と同じく少し離れたところに身をおいて、揶揄とは違う醒めたまなざしで自分の作った若者たちを見つめているような感覚、それが三浪津の非現実感の正体ではないだろうか。

ウソンまでもが周囲の熱気に巻き込まれて過去の自分の態度を自己批判し、つづいて全員が将来の希望を述べあう途中でポソンと挿入される、「生物学がなんであるかも知らないで、新文明を建設すると買って出る彼らの身の上も哀れだし、彼らを信ずる時代も哀れである」という作者のつぶやくような声は、作者自身は決してこの熱気に巻き込まれていないことを表わしている。あたかも舞台の上や映画の中できりひろげられる感動的な場面に涙を流しつつも、意識の底ではそれが演技であることを決して忘れていない観客のように、あるいは素晴らしい夢を見ながら自分がいま見ているのは夢なのだとの心の奥で言い聞かせる声のように、作者のつぶやく声は、ヒョンシクが述べる未来の抱負が現実にはどれほど頼りなく危ういものであるかを暴露する。そうなのだ、三浪津の非現実感とは夢の非現実感とよく似ている。昨夜、すべての葛藤を解消する秩序を作りあげて微笑をうかべながら眠りにおちていったヒョンシクはひとつの夢を見たのではないか。それが三浪津の大団円ではなかったのだろうか。たとえその中ですべての願望が成就されたとしても夢はやはり夢にすぎないのだとささやく作者の醒めた意識の声、三浪津の大団円がわれわれに与える

非現実感は、そんな聞こえない声から来ているように思われる。

本章では、三浪津がともなう非現実感の正体をさぐるために、作者によって感情融和の場として構想された大団円の舞台の装置Ⅱ文章上の技巧を検証する。つづいて最終節のさらなる非現実感を考察してから、最後に、こうした舞台立てにあらわれた作者の民族認識について考えてみたい。

2 舞台の装置

舞台の背景は大自然である。人間たちの葛藤を解消させる手段として、人間の力をはるかに超えた大自然の脅威よりも相応しいものはない。三浪津駅から出たヒョンシクたちを圧倒するように眼前にひろがった大洪水の描写に、李光洙の写実の力はいかなく発揮される。

「果たして、すごい水である。左右の山を残して、あとはすべてが真っ赤な泥水だ。河の真ん中でうねうねと渦を巻きながら流れ下ってゆく水の音が聞こえるようだ。その水が左右にならぶ山の端をえぐりとり、いくらもたたないうちにその山々の麓が落ちていきそうである。

道が狭くて抜け出すこともできずに浪立つよどみというよどみは、ひとつのこらず溜め寄せられて陣をなし、先にゆく水たちが全部流れ下ってゆくのを待っているかのような道。道を失った水は人間の住む村中まで侵入し、人々をみな追い出して室内、厨房、押入れといわず、すべて占領してしまった。そうして家を失った人々はみな、子供を背負い老人を引っ張って高い高い場所をもとめて山に這いのぼる。(中略)

雨はやんだが空にはいつあふれるかわからない黒雲がとぐろをまいて流れている。すごい勢いで東に向かっていたかと思うと、何を思ったのか、また西をさしてどっと流れてゆく。ときおり堪えきれぬように大きな雨粒がざあざあどこぼれおちる。裸の高い山には突然できた瀑布と細い流れが逆さづりになったのが、まるで黒い地のおちこちにき

まぐれに白い線をひいたように見える。そのいくつもの流れが裸の山々の肉を削り骨を穿ちながら落ちてくる音が、恐ろしげに流れゆく河の水音と合わさり、雄大な合奏を聞いているようだ。(中略)

空の上も地の下もすっかり水の世界である。この水の世界に立って人々は「いったいどうなるのか」と空を仰ぐのみである。」(一一九節)

このような自然の脅威をまのあたりにして、登場人物たちの心には、一瞬、個人を越えた「共通の思い」がわく。その思いは持続せず、すぐに皆は「それぞれの自分」に逆戻りしてしまうのだが、この瞬間に生じた感情は消えたように見えてもやはり心の内部に残留しており、このあと妊婦の看病や慈善音楽会などの実際行動の中で反復して表面化されることで、だんだんと定着してゆくことになる。

徐榮彩氏はこの洪水の場面で「テキストの前面に浮上するのは、被災者たちの困窮した状況ではなく、これを背景として慈善活動をおこなう若い理想主義者たちの活気あふれる身のこなし」(傍点引用者)だと書いている。大自然の脅威の前で無力な人々を「背景」にして若者たちの動きが「前面に浮上する」という言葉は示唆的である。それは自然と人間たちを効果的にとりいれたスペクタクル映画を連想させる。

まず画面に強調されるのは、自然災害のすさまじさである。洪水に追われて上へ上へと山を這いのぼる人間たちがごま粒のように鳥瞰され、つぎに苦しむ妊婦をかかえた一族へとレンズの焦点がしぼられる。そこに来あわせたヒョンシク一行は近くの酒幕を借りて妊婦を介抱し、医者も呼んでやる。涙を流して感謝する姑と、気持ちを外にあらわすことに慣れておらず最後までむっつりしているその息子。つづいて場面はがらりと変わり、ヒョンウクが警察署長に面会して段取りをととのえたあと、駅の待合室で慈善音楽会が開催される。作者は出演者たちの服装を最初から朝鮮民族の色である白色に統一しておくという気配りを見せている。音楽会を成功裡に終えた熱気のためやらぬまま旅館に帰った彼らは、ヒョンシクの演説に煽動されるようにして民族の文明開化をめざす秩序の中に熱狂的に組み込

まれてゆく。

三浪津の非現実感、作者によってまるで映画のシナリオのように準備された、あまりの手際のよさにも由来するのではなからうか。『無情』の前半が作者の内部からはからずも「流れ出した」部分だとするならば、大団円へと高まってゆくこの三浪津の場は作者が意識的に「作り出した」部分である。作者によって作り出された舞台で、すべてはクライマックスの感情融和をめざして進行してゆく。融和の対象には登場人物だけではなく読者も含まれる。作者は、読者の意識にひっかかって融和の感覚をみだしその必要要素をあらかじめ周到に排除する。それは決して在るものを書かないことによってではない。在るものは在るがままに、ただ読者がそれを意識しないように書く技巧によってである。事実をありのままに描写しながら、それを読者にほとんど意識させずに読み流させる手法は、たとえば京城学校でヒョンシクが学生を煽動した事実を目につかぬほどさりりと書き流してあった、あの手法である。⁽⁹⁾

「中幕」ではすでにこの手法が駆使されている。植民地における列車内の光景には、その地の人々の心を傷つけるものがどんなにか多かったことだろう。だが『無情』に描かれた一九一六年夏の京釜線の二等客車の和やかさは、麻想渉が『萬歳前』で描き出した一九一八年冬の三等車の暗澹たる情景とは別世界である。もちろんヒョンウクの兄ヒョングクさえ乗ったことがなかったという二等車を、三等車と同列に扱うわけにはいかない。作者もまたその点に関して決して無頓着であつたわけではなく、ヒョンシクがヒョンヤンへの往復で乗った三等車と身分上昇して乗ることになった二等車とでは、画然とした違いがつけられてはいるが、それでも『萬歳前』の三等車の陰鬱さとは比べようがない。

「万歳事件」以前の武断統治下の検閲の厳しさという問題や、『無情』が発表されたのが、言論がきわめて制限されていたこの時期において唯一の発表機関だつた御用新聞「毎日申報」であるという事情を考えれば、これは当然ともいえるかもしれない。そのほか本質的に穩健的改良主義であつた李光洙自身の政治姿勢もかわつてこようが、こ

こでは踏み込まない。ともかくも二等車におけるヒョンウクとヨンチュエの白衣のさりげない強調や、汽車が南大門駅を発車したとき泣き出したソニョンをにこやかに見ている「内地人たち」⁽¹⁰⁾(初版からは「外国人たち」という言葉に替えられている)など、作者は注意深く植民地の車内を描写しつつ筆をすすめる。

「大団円」の朝は、客車に入ってきて帽子を脇にはさみ丁寧にお辞儀をした車掌の、「線路が二ヶ所破損し、四時間後にならないと発車できません」⁽¹¹⁾という言葉ではじまる。三浪津のもつ夢か舞台のような非現実感、この言葉から早くも醸し出される。この車掌の言葉をはじめとして、警察署長とヒョンウクの会話、慈善音楽会での挨拶など、三浪津で話される言葉は日本語か朝鮮語かを意識させないよう意図的な曖昧化がおこなわれている。あたかも夢のなかでは、話せるはずのない外国人と苦もなく意思疎通できるように、あるいは、暗い活動写真館のなかで外国の俳優たちが弁士の口を借りてささやく愛の言葉が観衆に少しの違和感も与えないように、また舞台の上で金髪のかつらをかぶった俳優が堂々とわれわれの言葉で台詞を述べても何の不思議もないように、三浪津では朝鮮語と日本語の壁は意識されない⁽¹²⁾。もちろんちょっと考えれば、彼らは日本語で話しているはずであるが、そのようなことをいちいち説明する煩雑さを避けるというよりも、読者の気分を害しそうな要素はさりげなく排除しながら作者はクライマックスを目指して話しを展開させるのである。

日韓併合後の武断統治下において朝鮮人が、たとえ慈善目的であろうと、人を集めようとするときにまず直行するのが警察署であり、日本人警察署長が日本人駅長と交渉し、巡査たちに日本旅館と街なかに広報させて聞くという徹底的に当局の管理のもとでしか聞くことができない音楽会であつたという現実はずべて書き込まれていながら、読者に刺激をあたえず検閲にも問題が生じないようにしている。警察署長はヒョンウクの志に敬意を表した挨拶の中で「あそこでは水害にあつて家をなくしたかわいそうな同胞が御飯も食べられずに雨に濡れてさまよっています」⁽¹³⁾(傍点引用者)と、「同胞」という言葉を口にして感動の涙を流すことにより、善意だけが強調された非現実的印象を

残す。

音楽会の聴衆たちのほとんどが二等車の客であることは、「その中にはときおり白衣を着た三等車の客もまじっていた」という作者の説明によって明らかにされている。二等車の客のうち朝鮮人がどれほどの割合を占めていたかは不明である。彼らの多くはヒョンシクやソニョンと同じ洋装か、もしくは一ヶ月前東京から帰ってくるときのピョンウクのように日本の着物を着ていたのではないだろうか。白衣の娘たちによる慈善音楽会に感動した聴衆たちからは八十円が寄せられた。三浪津でもっとも現実感をもっているのはこの金額である。ヒョンシクの京城学校の月給の二ヶ月分をこす金額であり、ソニョンを得る以前に彼の財布に入った最高額でもある八十円が⁽¹⁶⁾あつというまに集まったのだ。「内地人」からの寄付も入っているとはいえ、この金額は二等車の客がもつ潜在的な力をあらわしている。

駅の待合室で音楽会が開かれているあいだも、水害にあった農民たちは地べたに座りこんで天を仰ぎなすすべを知らずに溜め息をついている。作者は、力も知恵もたない彼らはほとんどと貧しく弱く愚かになるばかりであり、「あのまま放っておいたらついには北海道の『アイヌ』と変わらない種子になってしまいうだろう」と嘆く。「彼らに力を与えなくてはならない」という直接介入した作者の言葉は、そのままヒョンシクの「科学！ 科学！」という言葉にオーヴァラップされて日本旅館八畳の間での演説にひきつがれる。そして最後には皆が泣いて感情の融和がなすとげられ、「三浪津の場」はめでたく終了するのである。

3 夢と希望の結末

最終節の第一二六節で語られる四年後の未来では、非現実感がますます濃厚となり、やはり、ヒョンシクがソニョンの向かいの席で見ている夢のつづきではないかと思われるほどだ。四年後の夏(一九二〇年)、ヒョンシクとソニョンは九月のシカゴ大学卒業を目前にしており、卒業後は欧州に行つて、その二年前からベルリン大学に留学してい

るピョンウクと一緒にシベリア経由で帰国することになっている。夢はあくまでも楽しく、よけいな要素は排除されねばならない。『無情』が掲載されている同じ紙面をうめていた第一次世界大戦の惨状や世界を震撼させた大事件は、夢の中ではあとかたもなく消えている。『無情』連載中の一九一七年の二月にはドイツが無制限潜水艦戦を宣言し、三月にロシアのロマノフ王朝が革命で倒れ、四月にはアメリカが対独宣戦に踏み切っている。大戦の真っ直中のドイツのそれもベルリンに留学するピョンウク、危険な大西洋を横断してそのうえ革命中のシベリア鉄道で帰国しようという計画、たとえ四年後にしても現在の世界の状況から見ればすべてが非現実的な夢の計画である。

だが、朝鮮の現実だけは夢の中にも確実に忍び込んでいる。ヒョンシクがヨンチュエを追つてピョンヤンに行った日、大同江へ向かう途中の七星門で見かけた老人は、四年後の未来でもあいかわらず健在である。あの日ヒョンシクは、朝鮮の因襲を体現したようなその老人を見ながら、自分の傍らにいる童妓ケヒャンとその老人とのあいだに横たわる断絶を痛感し、自分がこの二人の両方にまたがる過渡の世代であることを自覚したのだった。あの時に未来を象徴していたケヒャンは、いまや梅毒患者として悲惨な生活を送っている。四年後においても、朝鮮では過去の因襲が若者たちの未来を圧倒しているのである。ヒョンシクを追い抜いてやると意気盛んだった京城学校のイ・ヒギョンは結核で早逝し、指導者としての特異な才能の持ち主キム・チョンニョルは北間島に行つてしまった。この地名が独立闘争を想起させることは言うまでもない。

一見楽天的な未来の夢の中においても、このように朝鮮の現実は見据えられており、それは決して楽観的なものではない。しかし作者は悲観的な時代を悲観的に描くよりも、悲観的な時代だからこそ、そこに生まれあわせたものに与えられる使命は高貴なのだという、あの悲壮な逆転の論理によって、『無情』の大団円と未来図をあえて希望にみちた夢として描いたのだろう。⁽¹⁷⁾そして、夢に陶醉した読者が読み終わったときに夢から覚めたような非現実感をあじわうにしても、一度読者の心に生じた希望はどこかに残留し、機会が来た折々に表面にあらわれながら、いつかは定

着して現実の变革につながることを願ったのではないかと思うのである。

4 李光洙と「民族」

最後に、李光洙の民族観について簡単に触れておきたい。李光洙が民族をどのように認識していたかという重要な問題を、「簡単に」語るができないのは当然だが、『無情』の中でヒョンシクが構築した秩序体系には、李光洙と民族とのかわり方がかなり原初的な形であらわれていると思うので、その範囲内で考えてみたい。

そもそもヨンチュエの生存を知って動揺したヒョンシクが、それまでの自分の生き方を立て直すために構築したのが、あの秩序であった。ヨンチュエの生存は自分がソニョンとの婚約によって身分上昇したことのやましさをあからさまにし、ソニョンとの恋愛は「近代的恋愛」に至りえず、京城学校における失敗は彼のオピニオンリーダーとしての自信を奪っていた。米国に向かうヒョンシクは、これからの人生を生き抜くために、なんらかの理念をもつことを迫られていたのだ。

ヒョンシクは動揺の中から得た「子供意識」を「だからわれわれは学びにゆくのだ」と逆転させることによって、文明を頂点とし自分を上位者とする秩序で学ぶ者たちを序列化し、葛藤を解消しようとした。しかしながらこの秩序は、なによりも「他者」たちを動かして参加させる原動力となる目的の具体性を欠いていた。その目的を明確化することでソニョンやヨンチュエだけでなく他の人々をもこの秩序に取り込むことが、ヒョンシクには必要とされていた。そのため準備されたのが、大団円の三浪津である。

大自然の脅威を前にして一行の心に一瞬浮かんだ「共通の思い」は、そのあと、農民の惨状をみかねた慈善行為のなかで定着していき、音楽会のあとのヒョンシクの演説でピークに達した。三人の女性から「私たちがするんです」という言葉を引き出したヒョンシクは、「そうです。われわれがやらなくてはなりません。われわれが学びにゆく意

味はここにあるのです」と言って青い切符をとりだし、「この切符の中にはあそこでぶるぶると震えているあの人たち……、さっきのあの若い人の汗も何滴か入っています」と、自分たちが汽車に乗る金と学ぶ学費をくれるのは「朝鮮」なのだと声をはりあげた。だが彼がもっている二等切符は、実際にはソニョンの父金長老の金で買われたものである。惨めな同胞を救うという大義名分をもつことで、ヒョンシクの秩序は学ぶ者のほかに、学ぶ者のために富を提供する者を取り込み、同時に彼の身分上昇を正当化したのである。富を提供できる階級、それは金長老のような金持ちであり、さっきの音楽会で証明されたように二等車の客たちである。ヒョンシクたちは同胞を思う心で彼らを感じさせて寄付を出させた。

昨晚のヒョンシクの脳裏には「新しい朝鮮」という抽象的な目的しかなかったが、今日三浪津で洪水に苦しむ農民に遭遇し、妊婦を実際に介抱し、最後に慈善音楽会をひらくことで、この秩序は目的を明確化され人を動かす力を持つことになった。逆に見れば、この秩序が存在理由と実効性を得て機能するためには三浪津での農民の惨状が必要だったことになる。登場人物たちの感情融和のためにしつらえられた舞台において、農民たちは大自然とともに「背景」であり、それも大自然に苦しめられてさらす姿が惨めなら惨めなほどヒョンシクの周囲の人々(と読者)の「共通の思い」をかきたてる役割を背負わされた背景物であった。この意味で『無情』においては「民族」の中核からむしろ農民たちは排除されている。主人公であるヒョンシクら一行、周囲の登場人物である二等車の人々、そして観客である読者は民族の感情融和の対象として作者に意識されているが、農民は「背景」としてしか扱われていないからだ。

学ぶ者と富を持つ者、李光洙はこの二者を社会の中核とみなしていた。一九二一年、上海からの帰国直後に発表した論説『中樞階級と社会』の中で、彼は人間の社会を生物の細胞にたとえ、「中樞階級」をその「核」になぞらえて次のように述べている。

「現代諸国の中樞階級を造成する者は一言でいえば、識者階級、有産階級で、日本も然り、英国も然り、米国も然

りです。この比較的少数の識者階級と有産階級が(その実、広い意味でみればこの二者は一致するか重なるものですが)、比較的多数の無識階級と無産階級を率いて導き、あたらしい日本を作り英国を作り米國を作ったのです。」(傍点引用者)

こう述べたときの彼の脳裏には、朝鮮においてこれから「中樞階級」を整備すべき修養同盟会の構想があった。この構想は上海で出会って生涯私淑することになった安昌浩の興士團思想から来ている。しかし李光洙が安昌浩に出会う以前からこの「中樞階級」の概念をもっていたことは、これまで見てきたように「無情」にすでにあらわれている。知識と實をもった二等車の客の人々、それが「中樞階級」であり、三浪津の舞台での登場人物であった。

「無情」にあらわれた李光洙の民族観は、以上でおぼろげながら明らかになったと思う。李光洙にとっての「民族」は朝鮮民族全体をふくみながらも、とりわけ核となる「中樞階級」であった。李光洙のこの民族観は最後まで変わらなかつたようである。『나의告白』の中の「民族保存」(傍点引用者)の章で、李光洙は、日本に協力した場合のメリットとしなかつた場合のデメリットをきわめて合理的に述べて、みずからの親日行為についての弁明を行なつた。そのデメリットとして、もし朝鮮の知識人が日本に協力しない場合には総督府が予防拘束あるいは戒厳令をひいて銃殺する三万八千人の名簿ができていたこと、朝鮮人学生に対して学校の門がとざされる可能性が大きかつたことをあげている。名簿の実在は証明されていないようだが、実際にそんな噂でもあつたとしたならば、李光洙が「民族」=中樞階級の危機だと本気で憂慮したであろうことは容易に想像がつく。朝鮮人学生から勉学の機会が奪われるということも、中樞階級の消滅を意味することでは同様である。

同じく『나의告白』には、上海臨時政府時代のエピソードとして、三・一直後に李光洙や新韓青年党の依頼で朝鮮に取材にいった「チャイナ・プレス」紙の記者の忠告が回想されている。感謝の意を込めて洋食で接待した李光洙たちに対して、朝鮮から帰ってきたばかりの記者は、これ以上煽動して犠牲を出すのはやめたほうがよい、これまで

育てた知識階級を失ってしまったら、あれだけの人材をもう一度育てるには時間がかかりすぎると忠告したといふ。⁽²⁾三十年前の記者の言葉を李光洙がこれほどはつきり覚えていたのか、それとも三年前まで続いていた日本統治下で中樞階級を守ろうとした彼の願望によって変形されてしまった記憶なのかはわからない。だが「無情」にあらわれた「民族」像から見て、李光洙の民族認識はともかく最後まで一貫していたように思われるのである。

七、註

(1) 金東仁全集 18、六〇頁

(2) 一一五節 全集 1、二〇七頁

생물학의 무엇인지도 모르면서 새 문명을 건설하겠다고 자랑하는 그의 신세도 불쌍하고 그의 불 믿는 시대도 불쌍하다.

(3) 一一九節 全集 1、一九八頁

과연 대단한 물이로다. 카우먼 산을 남겨놓고는 은봉시 발진 후물이로다. 강 한가운데로 넘실넘실 소용돌이들며 가며 물리 내리가는 물소리가 들리는 듯하고 그 물들이 카우먼의 불어선 산골이를 마쳐 일마 아니 되면 그 산들의 밑이 파져나갈 것 같다. / 진이 좁아서 마치 파지 못할 듯 하여 우복우복한 웅덩이는 하나도 남겨놓지 않고 물어들의 사신을 치고 앞산 골들이 내려가기를 기다리는 것 같다. / 진을 잃은 물은 사람 사는 촌중의까지 침입하여 사람들과 다 내몰고 방안, 부엌, 보자기까지 있는 온몸 전염을 하고 말았다. 그리고 진을 잃은 사람들은 모두 아이를 업고 뛰어들어 이 골고 높은 피, 높은 피를 찾아 산으로도 기어오른다. (中略) / 비는 그쳤건만 하늘에는 언제 쏟아질지

모르는 것은 구름장이 붓글씨를 떠든다. 부리나개 동면을 향하고 달아나가는 무슨 생각이 나는지 또 서편을 향하고 물러간다. 이따금 참다 못한 듯이 맑은 빛깔을 이루 수면이진다. 빌거벗은 높은 산에는 갑자기 폭포와 시내가 거꾸로 떨어질 것이 마치 검은 바탕의다가 여기저기 되느라도 찬글을 그의 높은 것 같다. 그 개천들이 빌거벗은 산들의 산을 꺾고 피를 우뚝 가지고 내려오는 소리가 무섭게 울러가는 강물 소리와 합하여 웅대한 합주를 듣는 것 같다. / (中略) / 하늘 위의 떠돌이 은봉골 세상이로다. 이 물 세상의 서서 사람들은 「어찌 되려나고」라고 하늘만 우러러본다.

(4) 同上 一九九頁

공통한 생각—— 즉 사람으로서 저마다 가지는 생각 「共通の思い」という言葉にはル・ボンの影響が感じられる。本稿(中)四、註(7)参照

(5) 同上

그러나 세 사람은 공통한 생각을 버리고 자라 제가 되었다. (6) 徐榮彩「無情 研究」ソウル大学大学院碩士論文 一九九一 五七頁

(7) 拙論「李光洙の自我」(一九九一『朝鮮學報第』百三十九輯において、筆者は「無情」における当時の映画技法との関連は一度本格的に研究されるべき課題であると述べた。
(八二頁)

(8) ヨンチュエとピョンウクは白いチマチョゴリ(註9参照)、ソニョンは白い洋服を着ている。(一〇四節参照)

(9) 本稿(中)五九頁、六一頁参照

(10) たとえばピョンウクとヨンチュエが黄州から二等車に乗り込んだとき、「車内には宜教師らしい老いた西洋人一人と、金モールを二本巻きつけたでっけりとした官吏が一人と、その他に着物を着た人が二、三人だけだった。彼らは全員、白衣を着た二等客をへんに思ったように、視線をこちらに向けてる。」(一〇三節 原文朝鮮語)あるいは、南大門駅で客室はほぼ満員になるが、「しかし白衣を着た人は、ピョンウクとヨンチュエ二人きりだ。」(一〇四節 原文朝鮮語)など。

(11) 一〇九節 全集1では「의족 사발들」(一八三頁)「毎日申報」では「넌더 사발들」

(12) 一一八節 全集1 一九七頁
『두 군데 선로가 파손되어 내시건 후가 아니면 발차할 수가 없습니다。』

(13) 一九一〇年代には駅長職は日本人に独占されていた。朝鮮人が駅長になるようになったのは二〇年代に入ってからである。(鄭在貞「朝鮮總督府鉄道局の雇用構造」橋谷弘訳/日本評論社「朝鮮近代の経済構造」一九九〇)警察署長が日

本人であったことを証明する資料は手元にないが、武断統治下で憲兵警察のこの時代に、警察署長が朝鮮人のはずはないと思われる。

李人植の「血의 涙」においては朝鮮人と日本人との間には通訳が必要であり、外国の聞き慣れない言葉が耳に異様に聞こえるなど、登場人物たちにとって言葉はつねに現実的な問題と意識されている。また麻想渉の「萬歲前」にも下手な日本語しか使おうとせず主人公をあきれさせる車掌が登場する。一九一〇年代までは日本語を話せる朝鮮人も多くなかった問題が生じていたはずであるが、「無情」において李光洙はこうした要素をあえて排除している。

(14) 一二三節 全集1 二〇三頁

『(前略) 저기는 수레를 당하여 짐을 잃은 분상한 동포가 밟도 못 밟고 비에 젖어서 방황합니다。(後略)』(傍点引用者)

(15) 同上

그 속에는 간혹 천 옷 입은 삼등객도 섞였다.

(16) 同上 五二頁

先月もらった月給三十五円のうち：(原文朝鮮語)

(17) 一二四節 全集1 五一頁

まだピョンシクの財布には百元を入れたことが一度もなかった。以前、東京から卒業して帰ってくる時、ある友人の好意で洋服代と旅費で合わせて八十円を入れたことがあるのみで、これがピョンシクの一生で初めて大金をもった経験であ

る。(原文朝鮮語)

(18) 一二三節 全集1 二〇四~二〇五頁

그 때로 내의 버려두면 마침내 북해도의 아이누나 다름없는 종자가 되고 말것 같다. 저들에게 믿음 주어야 하겠다. 저 식을 주어야 하겠다。(中略)／『과학, 과학!』

(19) 피昂シクの米國留學は、李光洙が第一次留學したときの日露戦争終結のころの希望的な雰囲気をもたせておいて、『나의告白』の「三戦論の教育を受けた私の考えでは、いま日本に

日本にいらっている二十八人が勉強をおえて帰ってきて、また私も勉強をおえる日には、わが国の鉄道と火輪船を全部自分たちの手で作って使えるような気がした。」(原文朝鮮語 全集7 二二二頁)という回想は、「ピ昂シクの考えでは自分とソニョンとまたピ昂ウクとヨンチュエとその他誰かは知らないがよく学ぼうとする人間何十名、何百名が朝鮮に帰ってくれば、朝鮮は一日か二日の間に突然新しい朝鮮になるように思われる。」(一一五節)という三浪津に向かう途中のピ昂シクの思いとよく似ている。李光洙は『余의 作家的態度』のなかで『「無情」を日露戦争で目を開いたころの朝鮮』(原文朝鮮語 全集10 四六一頁)を描いたと語っている。自分が最初に留學した当時の希望にみちた雰囲気をもたせておいて、自分が織り込んだのではないだろうか。

(20) 一二四節 全集1 二〇五~二〇六頁

『우리가 하지요!』(中略)／『축습니다. 우리가 해야지요!우리가 공부하려 가는 뜻이 여기 있습니다。(後略)』

ヨンチュエ・ソニョン・三浪津(波田野)

(中略)／『이 차표 속에는 저기서 얻은 라는 저 사람들... 아까 그 월은 사람의 몸도 몇 방울 들었어요...(後略)』

(21) 農村で生まれ育ち五山学校時代には啓蒙の対象として農民としか接して彼らの実体をよく知っていたはずの李光洙が農民を背景におしとどめたのは何故なのか。実体を知っていたがゆえに李光洙は彼らに絶望していたのではなからうか。「나」の中で李光洙は農民たちの姿を辛辣に描き出している。求めようとしないものには与えることができない、もっとも賤しくもっと悲しく生きてくる者がそれが伝道の対象にふさわしいと考えたトギョンは、先祖代々賤しめられてきた大(芸人)村を選んで伝道にゆく。ところが彼らは思ったより豊かでまた幸せに生きており、困難に関しても無理に変える必要を覚えていない。私立の民族学校に子供を通わずというのが返事だった。歓待され体よく見送られたトギョンは、民衆の姿に絶望してこう考える。「民衆とは勢力ある者におもねりへつらう動物だった。食べるものがあつたらあつたらどこに付き従うのが民衆の本能だった。」

トギョンのこの言葉は、五山時代の李光洙が農民に対してどれほど絶望していたかがわされる。

(22) 全集10 一〇六頁

現代諸國의 中福階級을 造成하는 者는 一言으로 말하면 識者階級、有産階級이니、日도 然하고 英도 然하고 美도 然한 것이다. 이 比較的 小數의 識者階級과 有産階級(其實

뒤은 意味로 보면 此二者는 一致하거나 重疊한 것이지만
 (는) 比較的 多數의 無識階級, 無産階級을 率하고 導하여
 새 日을 作하고 英을 作하고 美을 作한 것이외다.

(23) 全集7 二七六〜二七七頁
 (24) 全集7 二五五頁

【謝辭】『無情』をはじめ読んで感じたのは、まったく唐突なことになつた。若いときにどこかで出会つたような気がする考え方と感じ方がそこにはあつた。このような作品が七〇年前(私がこの作品を読んだのは一九八六年のことだつた)に朝鮮人作家によつて書かれてゐることを不思議に思い、その理由を知ろうとして書いたのが本稿である。『無情』を知ると同時に、私自身の内部にあるものを知るために書いたといつてよい。一九八七年の春から一年間、筆者は東京外国語大学朝鮮語学科の聴講生として故長璋吉先生のゼミに参加した。ゼミでは一年間を通じて『無情』を読んだ。一年の終わりに長先生に提出した「李光洙と『無情』」という長いレポートが本稿の土台になっている。長先生は神田外語大学に移られて、その年の十一月に亡くなられた。『無情』を本格的に研究したいと考えて準備中であつた筆者は大きな衝撃をうけた。

長先生が李光洙について述べたことの中で忘れられないのは、「李光洙は何かと格闘した印象を与える作家だ」という言葉である。いったい何と格闘したのかおっしゃらないまま長先生は逝つてしまつた。この「何か」の正体が私なりにうつつすらと分かつたような気がしたのは、本稿(中)を書き終えたころだつた。それはアジアの知識人たちが向き合ねばならなかつた「近代」というものではなかつただろうか、そんな考えがぼんやりと浮かんできた。しかし私の力がいたらないために、そうしたことを本稿でどれほど明らかにできたかは疑わしい。そもそも私自身がこの「近代」というものをどうとらえ、どう向き合つたらいいのか、確固とした立場を持ちえていない。『無情』という作品に接することで得られたものは、いまのところ「近代」への漠然とした疑問にとどまつている。

『無情』という一つの作品を読み解くための手続きとして、『李光洙の民族主義思想と進化論』他いくつかの論文を書かねばならなかつた。いよいよ作品論にとりかかってみると、ひどく量が膨らんでしまい、結局『無情』の研究』は(上)(中)(下)の三部にわけざるをえなくなつてしまつた。学会誌に発表する論文としては変則的な形になり、編集委員会にご迷惑をおかけしたことをお詫びしたい。

この間、東京外国語大学の三枝壽勝先生に資料その他さまざまな面でご助力をいただいた。『無情』について書きたいという意

欲を下さつたのは長先生であるが、実際に書きつづけることができたのはひとえに三枝先生のお力による。お二人の先生に心からの感謝をささげ、つつしんで長先生のご冥福をお祈りしたい。

(県立新潟女子短期大学助教授・951新潟市関屋下川原町一―四八〇)